
流星のロックマン 試される絆

ツリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 試される絆

【Nコード】

N3091L

【作者名】

ツリー

【あらすじ】

ロックマンがメテオGを破壊してから約半年。

スバル達が6年生に進級してからのストーリー

(ストーリーはある程度考えており、原稿も多少作っていますが

更新はかなり不定期になります。それでも良い方は宜しくお願ひします。)

今までのあらすじ

絆。それは時として脆く崩れやすいものであるが、時に無限の力を引き出すものでもある。

シューティングスター・ロックマンこと星河スバルは

その絆の力でこれまで三度世界を救ってきた。

そして次に始まるうとする戦いも絆が試されようとしている。

その戦いには多くの人の感情が交錯し合う。

そしてもう一つ彼等の心も試されようとしている。

スバルは最後まで仲間を信じる事が出来るのか。

彼はどこまで絆というものを力に変える事が出来るのだろうか。

今までのあらすじ（後書き）

初めまして。ツリーと申します。自分でも小説を書いてみたいと思
い、

思いきって投稿を始める事にしました。

初という事もあって話が極端に長くなったり短くなったり

話がおかしくなったりするかもしれませんが

その時は皆様のアドバイスを参考にしたいと考えているので

ご協力よろしく願います。

6年生初日(前書き)

これからちよくちよく頑張っ
て行くつもりです

6年生初日

『オイッ！！起きろ、スバル！！』

とある一室のベッドの傍らで誰か（？）が怒鳴っている。

知っている人は知っているだろうがかつてはFM星育ちのAM星人であり、

現在は星河スバルのウィザードとなった電波体ウォーロックである。

「ううん。あと5分・・・」

『さつきからそれ何回目だよ。今日は始業式とやってやつがあるんだろ・・・って』

言ってる矢先から寝るなああ！！』

「ああ、もう分かったよ。ところで今、何時？」

『ハンターを見てみな』

言われてみると何と既に8時過ぎ。

スバルはウォーロックの方を見るとコクンと頷いた。

「うわゝ。遅刻だゝ！！」

今日からスバルは6年生。その初日から遅刻をするのは格好が悪い。

あつという間に着替え、下の階にドタバタと駆け下りるスバル。

「母さん、おはよう。」

「あら、スバルおはよう。いやもうこんな時間だからおそようかしらね」

「母さん、面白くないよ。ロック、電波変換させてよ」

『やなことだ！！それに何度も言うが電波変換は道具じゃねえ！！』
かなりウォーロックの機嫌が悪い為、スバルは諦めてしまった。

渋谷外に出ると（予想はしていたが）いつもの3人組が出迎えていた。

「ほーしーかーわーくーん。6年生初日から朝寝坊とはいい度胸してるわねええええ」

ルナは顔では笑っていたが背後には身の毛がよだつほどのオーラをまとっていた。

「い、委員長。こんなところで怒っていたら本当に遅刻しちゃうよ。早く行こう。」

そう言つてスバルは学校へ向かつて駆けだした。

「あつ、待ちなさい」4人は突っ走った。

まあ、そのお陰で遅刻2分前に教室に着く事が出来たのだから結果オーライというべきだろう。

『普段からこの位早ければいいんだけどよ』
残されたウォーロックが独り言を呟いた。

『さて暇になっちまったし、ウィルス退治にでもいくかあ』

ウォーロックが何処かへ向かった直後、ウェーブライナーが到着し、一人の青年が勢いよく飛び降りた。

「あゝやっとな着いた。ここがコダマタウンか。思っていたより自然

が多いな。」

『良かったですねハヤト。あなたの希望していたような場所で』
「ああ」

6年生初日（後書き）

終盤に出てきたハヤトという人物。その存在はこれからどんどんこの物語に関わってきます。次回もお楽しみに！意見、感想等お待ちしております。

早い朝

朝、スバルが目を覚ますとハンターは6時過ぎをさしていた。

『オウ、スバル。今日は珍しく早いんだな』

「うん。まあ、たまたまだと思うけど」

『いつもこんな感じだとコツチも助かるんだけどよ』

着替えてリビングに行く茜と大吾は既に起きていた。

「おはよう」

「おう、おはよう。今日は珍しく早いんだな」

(ウオーロックと全く同じ事言っているよ。そんなに僕は普段よく寝ているのかな・・・?)

「朝ご飯出来てるわよ」

「はい」

メニューはご飯、豆腐の味噌汁、焼き魚だった。

「いただきまーす」お腹がすいていたのか箸が早く進んだ。

「あゝ美味しかった。御馳走さま。」

「はい、お粗末さまでした。」

準備を整え、学校に行くだけになった。

『オイ、スバル。支度終わったんだしあの女を待っていたらどうだ？』

「うん、そうしよう。父さん、母さん行ってきまーす」

「はい、いつてらっしゃい」

「おう、いつてらっしゃい。気を付けてな」

勢い良くドアを開けると眩しい日差しがサンサンと照りつけていた。

「気持ちのいい朝だね、ロック」

『ああ、太陽が眩しいぜ。』

そんな話をしているといつもの3人がやって来た。

「あら、今日は早いのね」

「うん！」

「明日からもこんな感じにしるよ。毎朝迎えに来てやっている俺達の身にもなれよな！」

「ゴン太君が言える事じゃないでしょう。今朝だって僕が起こしに言っただけじゃないですか」

「キザマロの言う通りよゴン太。あなたも少しは早起きする努力をしない！」

「め、面目ねえ」

(・・・そもそも迎えに来てなんて頼んでないよ・・・)

『おい、お前ら。取り込み中悪いが学校遅刻するぜ』

スバルのハンターからウォーロックが勝手にウィザード・オンした。

「きゃ〜怪物！」

『誰が怪物だ！お前らが喋っているから忠告してやったのによ』

「もう脅かさないでよロック。今何時？」

『8時過ぎてるぜ』

スバルの家から学校までは徒歩で約10分。更に教室は6年生になって最上階にある。このまま普通に行けば遅刻は確実だ。

「みんな走るわよ」

「え、お、おう」

「うん」

「チョット待つて下さ〜い」もともと運動能力が低いキザマロにとっては少々無茶な事だった。

教室内で

「そうそう、スバル君知っていますか？」とキザマロが切り出した。きた。

「え、何を？」

「どうやら今日3人このクラスに転校生が来るらしいのです」

「へえ、そうなんだ」

「男の子が2人、女の子が1人らしいです。一体誰なんでしょう、楽しみですね」

ふとハンターを見るとウォーロックがやけにおとなしい事に気が付いた。

「ロック、今日はやけに大人しいんだね」

「あ？どういふ事だよ」

「いつものロックなら『暇だ~~~~~!!』とか言って退屈そうにしているらしいのにさ」

「転校生っていうのに興味がわいてな。誰が来るんだろうな」

「フーン、そう」

「何だよ素っ気ねえ返事だな・・・スバル・・・スバル・・・おい、スバルウウウ!!!」

ウォーロックがこれだけ大声を出しても当の本人は聞こえていない。それもその筈、スバルは宇宙の本を読み始めてしまったのだから。こうなったらよほどの事がない限りその世界から抜け出さないので。

8時30分。担任の育田先生が入って来た。

早い朝（後書き）

長くなつてしまった・・・
感想お待ちしています

サプライズ

「ホームルームを始めるぞ。白金、号令を頼む」

「はい。起立、礼」

「……おはようございませう」

「さて知っている者もいると思うが今日は転校生が来るぞ。」

「……わあ……」

教室の中では誰が来るのかという話で持ちきりだった。恐らくそれほど盛り上がっていないのはスバル位のものだろう。

『おい、スバル。俺はもう3人とも分かったぜ。』

「えっ、一体誰？」

『それは見てのお楽しみだな』

「それじゃ順番に紹介するぞ。一人ずつ入って」
ガラッ。

「双葉ツカサです。残り6年の1年間だけですが宜しくお願ひします。」

「宜しくツカサ君」「おかえりツカサくん」という歓声とともに拍手が起こった。

「じゃあ2人目。入ってきなさい。」
ガラッ。

「皆ジャックだ。以前は迷惑かけちゃってすまねえ。これから宜しくな。」

「宜しくジャック」という歓声とともに再び拍手。

正直ジャックは以前ディーラーのメンバーだけあってクラスの面々が自分を受け入れてくれるか不安だったが、皆は自分を受け入れてくれた。その事にジャックは感激を覚えた。

さて、残り1人となったが中々入って来ない。

「はい、拍手は一旦ストップ。最後の1人を紹介するぞ。」
この時点である人物が入ってくる事を誰が予想できただろう。
ピンク色のパーカーが特徴の女子が勢い良く入って来た。

「ベイサイドシティから来ました響ミソラです。宜しくお願ひします！」

辺りは一瞬静まり返り、次の瞬間、

「わ〜！」「ようこそミソラちゃん！」「こちらこそ宜しく！」等等先程の二人とは比べ物にならないほどの拍手大喝采が起こった。

「さて、それじゃあ3人の席はと・・・」

先生が教団から座席票を出して希望の席を各々に聞いた。するとミソラは真つ先に

「先生。私スバル君の隣がいいです。」と言った。

「・・・えっ？」「咄嗟の事で何が起こったのか分からなかった。

『ホ〜良かったなスバル。あの女お前の隣を希望したようだけ。』

「そうなんだ・・・って、ええええええ！」スバルが驚いている間に既にミソラは隣の席にいた。

「宜しくね、スバル君」「ミソラはスバルにウィンクした。

「う、うん」

その直後にスバルは周囲からの殺気を感じ、寒気が体を襲った。その殺気はツカサ、ジャックを除いた男子全員とルナからであった。

何故ならスバルの席がほぼミソラを独占できる位置であることに加え、スバルを「君」付けしたことから二人が知り合いで相当仲がよい事を知ったからだ。

（（なんでスバルがミソラちゃんと知り合っているんだ・・・）
）いわゆる嫉妬である。

「どうかしたのスバル君？顔色が変だよ？」

「え、あ、いや・・・何でも無いよ・・・」そういうのが精一杯だった。

「では、HRを終了するぞ。1時間目は算数だ。しつかり準備して

「おけよ。」

休み時間になるとミソラの周りにどつと人が集まって来た。

「ミソラちゃん、握手して」「サイン下さい」

「写真集買ったよ」「つぎのCDも楽しみにしているからね」

スバルはその勢いで席から追い出されてしまった。仕方が無いのでツカサとジャックに話を聞きに行った。

「二人とも久し振り。」

「そうだね、スバル君」

「ああ」

「ツカサ君はヒカルを封印できたの？」

「ううん」

「え・・・」

「まあ、結論から言えば出来なかったというよりしなかったんだ。」

「それ、どういう事？」

「話すとちよつと長くなるんだけど聞いてくれる？」

「うん」

サプライズ（後書き）

何と言ったらいいのやら・・・
感想待ってまゝす

ツカサの通り道（前書き）

今回今までに増して長くなりそう

ツカサの通り道

ツカサは赤ん坊の頃、両親にドリームアイランドという名のゴミ収集所に捨てられた。その憎しみの感情から生まれたのがツカサのもう一つの人格、ヒカルだ。そしてその感情をFM王ケフェウスの右腕だったFM星人ジェミニに利用されジェミニ・スパークとして口ツクマンに挑み、一時的にスバルを絶望に追い込んだこともある。その事に関してツカサはスバルに対する罪悪感を覚え、ヒカルを封印する為、ナンスカで修行することにした。その後、とある事件でナンスカを訪れたスバルと修行の目的で幾度か戦った。さらにその後…

「おいツカサ、どうやら本気でオレを封印するつもりらしいな。」

「うん。もう誰も傷付けたくないから…」

「親への憎しみは消えたのか？」

「それは…」

「そりゃあ消えてねえよな。もし消えているならオレの存在も消えているしな。」

「………」

「まあいい。それよりツカサ、もう一度オレと相乗りする気は無いか？」

「え…!？」

「ここでの修行でオレの心も大分落ち着いた。もうそう大した事が無ければ派手に暴れる事も無くなるだろうしな。」

「……分かった。約束してくれるならこのまま僕の中にいてもいいよ。」

「へっ、ありがとよツカサ。」

「うん。これからも宜しくねヒカル」

「ああ」

こうして修行を終えたツカサはナンスカの地上絵の場所にいた。

「……………」

「どうしたツカサ？」

「ヒカル。ジエミニの残留電波はまだ僕達の体の中に残っているんだよね。」

「ああ、そうだな。」

「何かそれあんまりいい感じじゃないんだよね。どうにかならないかな？」

「そんな事オレに言われてもよ……………」

「それなら俺達についてこいよ」「！！！」

ツカサが振り返ると見覚えのない男が立っていた。

「あなたは？」「オレは暁シドウ。サテラポリスだ。」

そう言うときシドウは内ポケットから取り出して食べ始めた。

サクサク、サクサク……………もうお分かりだろう。そう、うまい棒だ。

『何処へ行ってもそれだけは譲れないのですね、シドウ』

「かたい事言うなよアシッド」

『かたい事ではありません。ここに来たのも任務があるからなのですよ。』

「分かった、分かった。」

シドウとアシッドの他愛もない話をツカサとヒカルは聞いていた。

「なあ、ツカサ。あいつらどう思う？」

「まあ、変わっていると言えば変わっているし、相性が良いと言えればいいんじゃないかな。」

一方

「大体お前細かすぎるんだよ。俺がいつ何を食べようと勝手だろ」

『誰も食べてはいけないとは言っていない。ただ、もう少し自覚してほしいと言っているだけです。シドウが事あることに仕事をサ

ボっているのでクインティア等が代わりにやっている事を知らない事は無いでしょうか？」

「ああ、分かった分かったよ。仕事をすればいいんだろ」

『その通りです。余談ですが彼、待ち呆けていますよ』

シドウはツカサの方を向いて言った。

「いやあ、悪い悪い。話が逸れちゃったな」

(ホントにマイペースだなアイツ)(そうだね・・・)

「はあ、それであな達についてこいというのは？」

「ああ！それな！君の体に残っている残留電波が気になっているんだろ？」

「！！え、ええ・・・」

「それを取り出してウィザードにしてやるよ」

「え！本当ですか」

「オウ、マジだ」

そしてツカサはシドウに同行しヨイリー博士によってジェミニを構築してもらった。

「ありがとうございますましたヨイリー博士」

「いえいえ、いいのよツカサちゃん」

「ツ、ツカサちゃん!？」

『ツカサ、もしその呼び方を止めて欲しいと思っているなら諦めなさい。博士は意志の強いお方。かつて私やウォーロックも抵抗しましたが無駄な努力でした。』

「そ、そうなんだ」

「さて、構築も終了したしな。ツカサ、帰る場所はあるのか？」

「はい。昔からお世話になっている施設がありますから」

「そうか。まあ、気を付けて帰れよ。」

「ハイ。色々お世話になりました。」そしてツカサがエレベータの方へ向かおうとするとシドウが呼び止めた。

「一つ言い忘れていた事が会ってな、ってどうかお願いがあるんだ。」

「何でしょう？」

「サテラポリス遊撃隊の一員になってくれないか？」

「僕がですか？」

「そうだ。メテオGの脅威が去ったとはいえまた似たような事が起きるとも限らないしな。」

『確かに。それに電波変換が出来る人数が多い事に越した事はありません。』

「でも僕なんかで大丈夫なんですか？」

「心配はいらない。メンバーには星河スバルや響ミソラ、牛島ゴン太もいる。」

「スバル君・・・ゴン太君まで・・・」

「どうだ？」

「・・・分かりました。僕で良ければ参加させてください。」

「よし！決まりだ。ハハハ・・・長らく引き止めちまったな。お疲れ様。今日はもう帰っていいぞ。」

「ありがとうございます。それとこれから宜しくお願いします。」

「ああ。こちらこそな」

「・・・っていう訳で今日この学校に戻って来たんだ。」

「フーン」

『「フーン」じゃねえよスバル。暁とアシッドのヤロウが生きていただと！？どういうことだ？』

言われてみれば確かにそうだ。アシッド・エースはディーラーのアジトでジョーカーの自爆から仲間を守るためジョーカーと共に散った。その後、ペディアの検索でも彼らの痕跡は微塵も発見できなかった。そのため彼らの存在は完全に消えたものだと思われていた。

「ねえ、暁さんが生きていたってどういう事？」「それは・・・」

キーン・コーン・カーン・コーン・・・

1時間目の始まりのチャイムが鳴った。
「また後だね」「うん」

ツカサの通り道（後書き）

やはり長くなった。しかも台詞が多い。ひょっとしたらこれが自分のスタイルと考えるとこんな悲観的に考える事もなくなるかも？感想待ってまゝす。

昼休み（前書き）

悲観的に考えるのは止める事にしました。
そうしないととてももちません・・・

昼休み

キーン・コーン・カーン・コーン・・・

「よし、では授業を終了するぞ。昼休みはゆっくり休めよ」

4時間目の授業が終わり弁当の時間になった。ミソラの周りには相変わらず男子が集中している。

スバルは先程の二人と話の続きをした。

「スバル。話の腰を折っちまうようで悪いが暁はディーラーのアジト以降の記憶がねえらしい。」

「記憶が無い？」

「ああ。気付いたらWAXAのメインコンピューターの傍らで眠っていた様だぜ」

「まあ何にせよ暁が無事だったのは良い事じゃねえか。アシッドのヤロウがいるのは気に喰わねえが」

「ロツク、相変わらずアシッドが気に入らないんだね」

「当たり前だああああああ！会う度にあんなからかわれ口調で話されて腹が立たねえ方がおかしいだろおおおお！」

「ところでさツカサ君。構築したジェミニ、チョット見せてよ。」

「うん、いいよ」

「オレを無視するなあああ」

「やれやれ、相変わらずだなウォーロツク」

『ジェミニー！』

「大丈夫。前みたいに悪さをする性格は抜き取ってあるから。」

『今のオレはツカサのウィザード。その役目を全うするだけだ。』

「お前も苦労してたんだな。」

「そう言えばさつきから僕達だけで話してたね。ゴメンネジャック君」

「別に気にしてねえぜツカサ。それに俺もここに戻って来た訳を話すべきだろっしな。」

『(コイツ喋り方は相変わらずだが結構丸くなったな。』
「そういえばジャックはあれからどうしたの？」

「ああ。スバル、ヴァルゴとコーヴァスがブライにデリートされて
奴にオレと姉ちゃんの事をお前が頼んだ事は覚えているか？」

「うん」

「あの後、お前の親父さんが全ての人に伝えたメッセージによって
全世界の人々がお前を地球に戻す為に動き出した。俺は姉ちゃんと
ソロと一緒にディーラーのアジトに行つて陰ながらその手伝いをし
たんだ。」

「そうだったんだ。ありがとう」

「礼にはおよばねえぜ。お前は俺達の目を覚まさせてくれたんだか
らな」

「・・・(照)」

「それからはどうしたの？」 ツカサ

「その後はな・・・」

〈回想〉

「スバルが無事戻ってきたみたいだぜ姉ちゃん」

「星河スバル・・・」

「これからどうする？」

「・・・サテラポリスに自首しよう」「えっ!?!?」

「私達は全てを失ったわ。今の私達に出来る事は何も無い。それに
犯した罪は永久に消える事は無いわ。生きてそれを償っていくしか
ないのよ。」そして二人は自首して大人しく刑務所に入った。

それから暫く経った頃・・・

「オイッ、マジか!」

「ああ、暁が戻って来た」サテラポリス職員が騒いでいた。余りに
やかましかったのでクインティアにも聞こえた。

「(シドウ・・・!!)」

あの事件以来もう二度と会えないと思っただけに、その喜びと

驚きは普通では無かった。

(でも今の私は彼に会う事も出来ない・・・) そう思っていると何とシドウの方から面会を願い出てきた。

面会室に行っても本人をこの目で確認するまでは確信が持てなかった二人だが本当にシドウ本人が向かい側のドアから入って来た時は二人とも驚いた。

「シドウ!!」「ティア! ジャック!」「!!!」

目を何度もこすっても目の前の現実が変わらない。紛れもない暁シドウ本人だった。

「どうして・・・あなたはあの時・・・」

「分からない・・・気付いたらここにいた。」

「う、ううとうう・・・」「クインティアは泣いていた。

「もう一度やり直そう。過ぎてしまった時間はどうしようもない。大事なものはこれからさ。」

「でも・・・」

「オレが長官達に交渉してみる。頼む、オレを信じてくれ」

「・・・分かったわ。アナタを信じる。」

その翌日、今度はクインティアのみが面会室に呼ばれた。壁で隔てられたシドウの顔には昨日の苦労の面影が若干見えるものの、顔に浮かべている笑顔はそれを遙かに上回る喜びを意思表示していた。

「やったぞティア! お前とジャックの釈放が決定した!」

「!! 本当に・・・?」

「ああ。ねばった甲斐があったぜ。」

「・・・」「クインティアはその事実可喜ぶべきなのか泣き崩れるべきなのか困った。

「ただ2つ条件がある」

「2つの条件?」

「1つ目は二人が遊撃隊に所属する事」

「遊撃隊って、私達はもう電波変換はできないわ。一体何を・・・」
「大丈夫だ。ヨイリー博士がヴァルゴとコーヴァスを再構築してくれる」

「・・・もう一つは？」

「オレがお前達の保護者になる事だ」

「そう・・・分かったわ。ジャックには私から話しておく」

「ああ、頼んだぜ」

〈回想終了〉

「・・・でこうして今日ツカサとあの女と一緒にここに戻って来た訳だ。」

「良かったね。暁さんが二人の為にここまでしてくれたんだ」 ツカサ

「まあな・・・」

「?どうかしたの」

「確かに俺と姉ちゃんを救ってくれたのは感謝すべきなんだろうけど、その日の夜・・・」

〈再び回想〉

シドウの仕事が終わり、自宅に戻る事になった3人。何処にあるのかと思いきや（見当はつくかもしれないが）WAXA館内だった。

とはいえ、遊撃隊隊長ということもあって他の隊員よりも部屋は広い。シドウ一人が使っても余るくらいだった。

その日の23時、ジャックが寝る支度を終え、歯磨きをしているとシドウとクインティアが寝室で話をしていた。

「ねえシドウ」

「ん、何だいティア？」

「どうして私達の為にここまでしてくれたの？」シドウは目をパチクリとさせて、

「何の事だ？」と聞いた。

「あなたはディーラーのアジトで自分自身を犠牲にまでして私達を守ってくれた。そして今日もまた私達を助けてくれた。何があなたをそうさせるの?」

するとシドウは真顔になって言った。

「お前の傍にオレがいたいからだ」

「!!!/!/!/!/」

「……ってちょっとカッコつけすぎたかな」

「バカ!!!」クインティアはそう叫んでシドウを思いっきり引っ叩いた。

「つて。何すんだよ!」クインティアは途端に顔を背けて言った。

「ゴメンナサイ。あなたがそう言ってくれたの初めてだったから・

」

「は?」

「キングの施設にいた頃あなたは私に好意を持っている事を態度では示しても言葉では言ってくれなかった。こんなところで言うのは変かもしれないけど……」そしてシドウの顔をまっすぐ見て

「私は……あなたが好き……」

「その言葉待っていたよ」

「えっ!?!」

「いや実はさ、ディーラーから脱走した後に告白しようとは思っていたんだけどお前らは残っただろ。それからあのアジトでジョーカーの自爆から皆を守るうとした時、お前に思いを伝えようとしたけど届けられたかどうか分からなかった。」

「届いてたわ……あなたの想いは全部私に届いた。でもあの時の私達には『願い』があった。今考えてみれば下らない事だったけれど……」

「でもこうして皆戻って来れたんだしティアといられると思うとオレも嬉しい。」

「シドウ……」クインティアは手をシドウの背に回して顔を押し付けて泣いていた。

(以下省略)

〈回想終了〉

「てな感じでシドウと姉ちゃんがいチャイチャしてて聞いている側としては物凄く不愉快なんだよ!」

「まあそうカリカリするなってジャック」コーヴアスがウィザード・オンした。

『『コーヴアス!!!』』

『おお、ジエミニにウォーロックちゃん』

『やめる!その呼び方!ヨイリーの婆さんからそう呼ばれる度に虫唾が走るんだからよ』

『ホオ、そうかい。相変わらずの甘ちゃんだな』

『んだとくおらあああ!』

『あ!?やんのか』

『上等じゃねえか、やってやるぜ』

『ほらほらお前ら止めようぜ』

『お前は黙ってる仮面野郎』

『仮面野郎・・・?言いやがったなテメーら。表に出ろ!!!』

『行ってやるぜ!!!』　コーヴアス

そんな三人(?)の会話(?)を聞きながらもう一組の三人は啞然としていた。

「ハ、ハハハ」

「なんだかんだで変わってないね」

「うん・・・」

「まあ向こうは好きにさせとこうぜ。どうせ最後はしょんぼりして帰ってくるんだしよ」

「そうだね」

「それより二人とも僕とブラザー結ばない?」

「ああ、いいぜ」

「スバル君、僕は…」ツカサは少し躊躇った。たとえスバルの方からブラザーを申請してきたとして自分にその資格は無いと思うからだ。そんなツカサにスバルは、

「心配要らないよ、ツカサ君。」

「えっ？」

「僕はツカサ君の過去を知った。まだ苦しみは続いているのかも知れない。でも、一人で抱え込まないで。君には僕達がついてる。君の苦しみは僕達が一緒に背負ってあげるよ。」

「スバル君・・・ありがとう。改めて宜しくね。」

「こちらこそ宜しく！」三人で中央に手を集めた。

「これでブラザー成立だね」「うん」「ああ」丁度三人が弁当を食べ終えたところだった。

だが、スバルには気になる事があった。無論暁の事だ。

『暁の事でも気になっているのか？』いつの間にかウォーロックが戻っていた。

「どうしてそれを・・・」

『勘だ』

「だってあれだけの大爆発があつたのに無事だったっていうんだよ。ミソラちゃんはこの事を知っているのかな？」

昼休みがあと十数分で終わろうとしているにもかかわらずミソラの周りには人だけが出ていた。

昼休み（ミソラ視点）（前書き）

この話は本当は6話の中に入れる予定だったのですが、
謝って投稿してしまった為、少々文章を書き換えて投稿しています。
なので今回非常に短いです。

昼休み（ミソラ視点）

4時間目が終わり昼休みが始まった。それを待ち構えていた様に大勢では表現的に足りないと言っても良いほどの生徒が集まって来た。何せ下級生まで押し寄せてくるくらいだ。まあ、（国民的）アイドルが自分達が関連している場所にいるのに会ってみたいと思わない人はいないだろう。そんな彼らの相手をしつつ昼休みが残り十数分となった頃……

「疲れた〜。ハープ〜助けて〜」

『ポロロン。アナタこういう展開になりそうなの予測できなかったの？』

「うう〜」

『まっ、頑張りなさい。その内助け船が来るかも……』

「何か言ったハープ？」

『何でもないわ』

〜　〜　メールサウンド

『アラ、本当に来たみたい。差出人は……スバル君からよ』

「えっスバル君から？……みんなちょっとゴメンネ〜」ミソラは一旦廊下に出てメールボックスを開いた。

「ミソラちゃん

突発的な話でゴメンネ

さっきツカサ君とジャックと話していたんだけど

暁さんが生きていたんだって

「ミソラちゃんは知ってた？」

「スバルより」

それを読み終わったミソラの表情は驚愕の一言に尽きた。何せあの現場をスバルと共に見た唯一の人物だからだ。それだけに驚きは普通じゃない。

「ええ~~~~~!!」

『ど、どうしたのミソラ?』

「暁さんが・・・暁さんが生きていたんだって」

『ええ!!彼が!?!』

「・・・よかった。暁さん無事だったんだ。」

『良かったわねミソラ。あ、そうだ、ついでにだから彼にあの事言っちゃえば?』

「あ、あのこと・・・」ミソラは顔を赤くした。

『必要なのは勇氣よ。ホラ、ガンバレミソラ!!』

「ハープ・・・うん、やってみるわ」ミソラは決心して返信画面を起動した。

「スバル君」

「暁さんが生きていたって本当!？」

「私全然しらなかったよ。」

「話は変わるんだけど今日の放課後、」

「屋上に来てくれない？」

「話したい事があるの ミソラより」

「よし、送ろう!」ミソラが送信ボタンを押したとき、昼休みの終

わりを告げる鐘が鳴った。

昼休み（ミソラ視点）（後書き）

やっぱり短くなりました。

さてそろそろ流星小説定番のあのシーンが出てくるかも？

感想お待ち致しております。

もう一つの一日（前書き）

今回は6〜7話の時間帯をハヤト視点で見ていることと思います。

一人暮らしなので何でも自分一人でやらなければならぬ面倒臭さはあるが、今現在のハヤトにはそう苦な事ではない。寧ろ楽しみにしている事がある。

『ハヤト、今日はホントに機嫌がいいんですね』

「当たり前だろ！久し振りにバイオリンとアコギ弾けるんだから」

『寝転がりながら言う台詞ですか』

「固い事言つなよ」

『そんな事をしているんだつたら私の名前決めて下さいよ』

「折角の気分を壊すなよ全く」

『話逸らさないでください』

「お前さ〜折角どんな奴にも対抗できるようにドリームPGM入れたのに性格まで七変化しちまうのか？」

『ハヤト・・・』

「ああ！もう！分かったよエレメント」

『エ、エレメント！？』

「そ、お前の名前」

『エレメント・・・私の名前』

「どうだ、気に入ったか？」

『いつから決めていたんですか？』

「あー、いつかは忘れた。ごく最近だ」

『どうしてその時教えてくれなかったんですか』

「お前が気に入ってくれるか分からなかったからだ」

『そんな事ありませんよ、ハヤトが決めてくれた名前なんですよ。私が気に入らない訳無いじゃないですか』

「お前・・・」

『お前じゃありません。もう私はエレメントです。その名を授かったハヤトのウィザードです。』

「・・・そうだな。最初から迷わずに教えておけばよかったな。」

『そうですよ。優柔不断なのはハヤトらしくありません』

「ああ」

『まあ、たまにはらしくないのも悪くはないのかもかもしれませんが』
「コイツ~~~~」

『……………』

「……………」

『「アハハハ」』

そんな会話をしながら時間は経ち、お昼になった。時刻は12:26。

昼はトーストを焼くことにした。

『またまたシンプルです』

「……………」

チン！

「おっ、焼けた焼けた」食パンの表面がいい色に焼けていた。

『今日は何をつけるんですか？』

「今日は蜂蜜。結構いけるんだな〜これが」

サクツ、サクツ、・・・大きな皿に積み上げられた10枚ほどの食パンがあつという間になくなった。

「ごちそうさま」通例手を合わせた。

『食べるの早かったですね』

「そうかい？」

『あれだけあつたパンがあつという間になくなっちゃいましたよ』

「だって美味しいんだもん」エレメントは啞然とした。

『ハ、ハヤト？大丈夫ですか？』

「どうして？」

『今の子供みたいな口調は何ですか？』

「え〜僕はいつだってこんな感じだけど〜？」これ以上ツツコムだけ野暮だと思つたエレメントは呆れていた。

食事に使つた食器を洗つてからハヤトはまた先程と同じように床に

寝転がっていた。

『ねえ〜ハヤト〜。何かやる事ないんですか?』

「んん?植物植えたりプログラム作ったりやりたい事なら沢山あるけど」

『じゃあそれをやりましょうよ』

「バイオリンとアコギがこないとやる気が出ない」

『何ですかそれ』

「ZZZ・・・」

『寝たフリですか・・・バレてますよ、起きてください。』

「ZZZ・・・」

『ハ〜ヤ〜ト〜』

「ZZZ・・・」

『ここまでできてしらばくれますか。よし、アレを使ってやる』エレメントはそう呟くと悪魔の様な笑みを浮かべて冷蔵庫の方へ向かった。一方のハヤトはというと、寝たふりをしていたつもりが本当に寝てしまった。そんな事はいざ知らずエレメントは薄い黄色い液体が入った小瓶を手にして戻った来た。

『これは本当に重宝しますね。この味覚を味わった者はほぼ100%目覚めるのですから』そしてハヤトの口をこじ開けて液体を一滴垂らした。数秒後・・・

「ぶっは〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!!!!」ハヤトは飛び起きた。

「エレメント〜、お前、アレ使っただる〜〜〜〜〜」

『当たり前です。寝てるふりをしていたハヤトが悪いんじゃないですか』

「寝たふりなんかしてねえよ。ああ、つたく、ソイツはかなり強酸なんだからさ」

『自業自得です』

「何だよそれ」

『そのままの意味です』

「・・・・・・・・」

『言葉に詰まった様ですね』

「ハア〜早く届かないかな〜」

『は?』

「ギターとバイオリンだよ。まだかな〜」そのまま床でゴロゴロしだした。

『私の話は無視ですか!全くこういう時のハヤトは本当に馬耳東風なんですから・・・・・・・・』

PM 2 : 3 8 「まだかな〜」・・・・PM 2 : 4 9 「まだかな〜」

PM 2 : 5 3 「まだかな〜」・・・・PM 2 : 5 7 「ハア〜まだかな〜」

丁度その時玄関前で車が止まる音がした。「おっ、来たか?」

ピンポン! 「お届けもので〜す」

「ギターーーーー!!」さっきまでのだらけはどこに行ったのか玄関へすっ飛んで行った。その様子をエレメントはクスクス笑っていた。

『あんなに喜ぶなんてハヤトもまだ子供ですね』

宅配の人から荷物を受け取り、勢いで二階まで上ってしまった。

エレメントも移動してきた。ケースを開けて各々が真空パックされているのを確認する。幸い、両方ともビニールは破れていなかった。

アコースティックをチューニングし、紅茶を一杯飲むと、時刻は3時40分を回っていた。

「さて、そろそろ最後の挨拶回りに行くかな」

『お隣さんですね』

「ああ。この街は人が本当に親切だな。来て良かったと思うよ。」

外に出ると夕日が黄色を含めたオレンジ色に輝いていた。

「空気がおいしいな。」
『本当。落ち着いた気分になれます。』
「お隣さんは花が好きなのかな？結構綺麗に手入れされてる」
『星河さんっていうらしいですね』
「！！星河……」
『？どうかしましたか』
「あ……いや……何でもない」（星河……まさか……）心のどこかが何かに引っ掛かったがそれで取り乱す様な事はしなかった。

ピンポーン！

「は〜い」ガチャリ、とドアが開き、あかねが出てきた。

「アラ、あなたどなた？」

「はじめまして。つい最近引っ越してきましたハヤトっています。」

「あら、あなたが引っ越してきた方だったんですか。はじめまして、私星河あかねです。宜しく」

「こちらこそ宜しく。ところで、あかねさんはお花が好きなんですか？」

「ええ、良く分かりましたね」あかねは少々御機嫌になった。

「一つ一つの花が丁寧に手入れされています。どんなに忙しくてもそれをかかさないと、そうしないとここまで維持するのはなかなか難しいですからね」

「さすがね……あら、ハヤトさんが手に持っているものって……もしかしてバイオリン弾けるんですか？」

「え？」今の今まで気づかなかつたがハヤトの左手には確かにバイオリンケースが握られていた。

「ええ……まあ……多少は」

「何か弾いていただけませんか？」

「まあ……いいですよ」

「じゃあ、どうぞあがってください。」
「お邪魔します。」と中に入った。

スバル家居間にてー

「隅々まで綺麗に整頓出来てますね」

「ウフフ、ありがとう」

「じゃあ準備しますので少々お待ちを・・・」ハヤトはペグを回して音調節を始めた。あかねが麦茶を注ぐとすると、ピンポーン！とインターホンが鳴った。

「スバルが帰って来たのかしら。ごめんなさい、ちょっと失礼」

「いえ、お気になさらずに」

(星河スバル・・・やっぱり・・・)

もう一つの一日（後書き）

ちなみに流星1く3をやった事がある人は分かると思いますが、
ハヤトの家は元々空き家だった場所です。

さてそろそろ定番を出す事にしましょうかねえ。
感想お待ちしております。

告白、そして・・・（前書き）

遅くなってしまうって申し訳ありません。

さて、恒例のアレをやりたいと思いまゝす。

何それっていうシッコミはナシで。

告白、そして・・・

帰りのホームルームが終了し、生徒は我先にと教室から出ていった。
「スバル君、ゴン太、キザマロ。帰るわよ」委員長の権威は恐ろしい。無暗に逆らえば何が起こるか分からない。だが、今日のスバルは違った。

「ゴメン、委員長。僕ちよっと用事があるから」そう言っただけで教室を出ていった。

「アイツの用って何だろうな、宿題を忘れたとか」

「ゴン太君じゃないんですからそれはありませんよ」

「怪しいわね・・・追うわよ」

「え〜！今日オレが楽しみにしていた牛井パツクの詰め合わせが来るのによ〜」

「ボクも久し振りの体操教室なんですけど」

「追うわよ！！」ルナの殺気だった顔が二人を睨みつけた。ゴン太とキザマロは恐怖に体を震わせつつも、

「き、今日だけは譲れねえ、じ、じゃあな！」

「ぼ、僕も同じです。委員長ゴメンナサイ」逃げ足の速い奴の如く二人は立ち去った。

「キ〜二人とも覚えてなさい！こうなったら私一人でも星河君に問い詰めてやるんですから」

その頃スバルはエレベータを使って屋上にいた。普段なら放課後にバスケット等をやる生徒が残っているのだが今日は何故か誰もいなかった。唯一人を除いて。

「（ホラ、スバル君来たわよミソラ）」

「（う、うん）」ミソラは何か言いたげそうな様子だったが言い出せずにフェンスの方を向いていた。

「ミソラちゃん」

「ス、スバル君!?」ミソラが振り向くとスバルが後方約3メートルほどの位置まで迫っていた。

「ゴメン。待たせちゃったかな?」

「ううん、そんな事ないよ。私の方から呼んだんだもん。」

「それなら良いんだけど・・・ところで話って何?」

それを聞いた途端、ミソラはまた後ろを向いてしまった。

『(チョットミソラ。ここまで来て・・・)』

「(分かってるよ、分かってるけどヤツパリ返事を聞くのが怖いよ・・・)」

『(ここまで来たんだからあと一息よ!)』

「(でも・・・)」

『(ミソラ! 勇気を出して!)』 その時ミソラの目に幻が映った。それは幼くして失った母親の姿だった。

「(ママ・・・)」 その幻は一瞬笑顔を見せると消えてしまった。

「(きつと私に頑張ってくれようとしてくれたんだね。有難うママ。迷いが無くなったよ・・・)」

その間スバルは後ろを向いたままのミソラに声をかけようか迷っていたがそうしている内に、

「スバル君」とミソラの方から声をかけられた。

「何、ミソラちゃん?」

「その・・・今日はスバル君に言いたい事があって」

「僕に言いたい事?」

ミソラの心臓が高鳴っている。迷いが無くなったとはいえ、緊張が解けたわけではない。それでも何とか呼吸を整えると、

「スバル君・・・私は・・・私はスバル君の事が大好きです。よかつたら付き合ってください!!!」

「!!!」

「(!!! 言っちゃった・・・)」

ミソラは言いきった達成感と共に遂に言ってしまった恥ずかしさで顔が真っ赤だった。一方のスバルはというとミソラと同じ位、いやそれ以上に顔が赤かった。何しろ、国民的アイドルから告白されたのだから。

「あ、あのスバル君、その・・・大丈夫？」

「え・・・う、うん・・・まあ、何とか・・・」

そこヘルナがエレベーターから出てきた。ちょうど二人の顔が真っ赤になっていたので何かがあった事を確信した。

「あなた達、こんなところで何しているのかしら？」

「！！い、委員長」

「ルナちゃん・・・」

「何故二人とも顔が赤いのかしらね？」

「そ、それは・・・」

ルナがどどん二人に近付いて来る。まるで袋の鼠状態である。

その時、スバルは急にミソラの手を握ってエレベーターの方へ走り出した。

「えっ・・・ちよっ・・・スバル君！？」

「あつ、コラ、待ちなさい！！」

不幸中の幸いかエレベーターは屋上で止まったままだった。ボタンを押して勢い良く乗り込んだ。そしてこれまたタイミング良くルナが来る前にドアが閉まった。屋上はエレベーター以外の下に降りる手段はないのでルナは再びエレベーターが戻ってくるまで待つしかなかった。

スバルはエレベーターが一階に着いた瞬間に再び走り出した。

「コラ、廊下は走るな！」と言う教師の注意の言葉も耳に入らないほど夢中だった。校門を出て公園を通り過ぎて気付いたら家の前にいた。

「ハア、ハア、ハア・・・ここまで来れば大丈夫かな・・・？」振り返ると息を切らしているミソラがいた。

「ミソラちゃん、大丈夫？」

「うん・・・大丈夫だよ・・・」

「とりあえず家に入るう？」

「うん」

急に元気になったミソラに若干の疑問を持ちながらもインターホンを押した。

ピンポン！

「は〜い」あかねが玄関まで来てドアを開けた。

「ただいま、母さん」

「お帰りスバル。それと、いらっしやいミソラちゃん」

「お、お世話になります」

「えっ、お世話になるってどういう事？」

「あれ、スバル君聞いてないの？私、今日からスバル君の家に住む事になったんだよ」

「ええ、そうなの！？母さん、どうして黙っていたのさ？」

「あら、その方が楽しそうじゃない。それともスバルはミソラちゃんと一緒に住むのは嫌？」

「い、いやそうじゃなくて・・・」ふとミソラの方を見ると涙目（無論演技の）になっていた。

「い、嫌じゃないけど」ミソラはぱつと笑顔になってスバルの腕に抱きついた。

「ちよっ・・・ミソラちゃんノノ」

「あらあら、すっかり仲良しさんね」とあかねにからかわれた。

「さあ、玄関で立ち話もなんだし、あがりなさい」

『その前に一ついいかオフクロ』

ウォーロックが勝手にウィザード・オンした。

「何かしらロック君？」

『この家に誰がいるな』

「えっ？母さんと僕達がいるじゃないか」

『そうじゃねえよ。もう一人誰がいる。それに何だ、この感じた事のある様なない様な周波数は？』

『ポロロン、アラ、言われてみればそんな感じお周波数ね』

『ゲツ、ハープ！』

『何よ、私をお化けみたいに！』

「二人ともやめなよ」「見事にハモツた。あかねは吹き出しそうになった。

「ねえ母さん、誰か来てるの？」

「ええ、最近お隣に引越してきた人が挨拶に来たの。バイオリンが弾けるらしいから今準備していただいてるのよ」

「そうなんだ」

「先に御挨拶する？」

「うん」

居間に行くと右目が青い髪で隠されている青年がバイオリンのペグを回していた。

「スバル、ミソラちゃん。こちらが引越してきたハヤトさんよ」

「初めまして」ハヤトは古泉 樹風のスマイルで応えた。

「星河スバルです」

「響ミソラです」

「宜しくね」

「こちらこそ「宜しくお願ひします」「二度目のハモリ。

「相性が良いんだね」ハヤトにまでからかわれた。

「さて、そろそろ演奏を聴かせていただきましょうか」

「いや、その前に」ハヤトが手を出して静止した。

「スバル君、ミソラちゃん、話をつけてきなよ」

スバル「えっ？」

「告白したんでしょ、どちらかが」

「ミソラ「!!どうしてその事を?」

「図星みたいだね」

「「あつ」「二人は見事にハヤトにカマかけられた訳である。

「話をつけてきた方が心を落ち着かせて聴けるでしょ、待ってあげることからさ」

「じ、じゃあ少し待っててもらおう?」

「う、うん」

「ゴメンナサイね。ドンドン引き延ばしてしまつて」

「全然かまいませんよ。演奏というものは聴く人と演奏する人の心が一つになつて初めて聴けるものですからね」

「じゃあ二人とも荷物を置いて話をしてきなさい」

二人は階段を上がつてスバルの部屋に入った。

「お邪魔します」

「ミソラちゃん、これから一緒に生活するんだから堅苦しい挨拶は抜きにしようよ」

「そう?スバル君がそれでいいなら私もそうするけど」

さて、話しだしたのはいいものの二人とも肝心の話の切り出そうとしない。見兼ねたハープは、

「スバル君」

「えっ、何ハープ?」

「ちよつとウオーロックを借りるわ」

「おい、ハープ、テメエ何のつもりだ!」

「いいから!」

「ギャ〜スバル助けてくれ!」

ウオーロックの叫びも虚しくハープは拉致つていった。

二人きりの部屋。部屋に残された二人。お互いの顔を見ると少しだけ目線を逸らした。

「あの、スバル君」

「何?」

「その・・・スバル君の答えを聞かせてくれるかな」

今度はスバルの心臓が高鳴った。

(僕の正直な気持ちを伝えればいいんだよね、よし！)

「ミソラちゃん・・・僕もミソラちゃんの事が好きです。僕でよかつたら付き合ってください！」

その言葉を聞くなりミソラは抱きついて泣いた。

「ミソラちゃん！？どうしたの」

「グス・・・大丈夫だよ。これは嬉し涙だから・・・しばらくして泣き止むと、

「良かった。スバル君と私の思いは一緒だったんだね」

「うん」

「でも・・・」

「？」

「告白はスバル君の方からしてほしいなあって」と両目を半分にしてからかい口調で言った。

「ゴ、ゴメン」

「フフ、冗談だよ。さあ、ハヤトさんの演奏聴きに行こう」

「うん！」

告白、そして・・・（後書き）

会話が深い・・・

そしてやっと書き終わった・・・

手が疲れた〜

おまけにグダグダ・・・

これでも読んでいただけたら幸いです。

それから意見、感想等もユーザー以外の方からも募集しております

初夜（前書き）

大変遅くなりました

初夜

ポンポンポン・・・

「よし、こんなものかな」

バイオリンの微調整を終えたハヤト。そこへタイミング良くスバルとミソラが二階から降りてきた。

「話は終わった？」

「はい」

「スバル君が告白してくれました」

普段のスバルならそれを聞いた途端に少なからず動揺するだろうが、この時はまんざらでもなかった。

「フフ、じゃあ始めましょうか。曲は、そうだな・・・カノン調」

ハヤトの旋律。それは余計なものを一切排除し、それでいて聴く者をその波に乗せる。三人ともすっかりはまっていた。

演奏が終わるとスバルとあかねは拍手をしたがミソラは何故か無表情だった。

「あれ、ミソラちゃんどうかしたの？」

「え、あ、いや何でもないよ。ハヤトさんの演奏が凄く上手かったからつい聞き入っちゃった」

「そう。気に入っていただけで光栄だよ」

「あら、もうこんな時間。ハヤトさん、今晚家で夕食でもいかがですか」

「え・・・いや、そこまで迷惑はかけられませんよ」

「遠慮なんてなさらないで。バイオリンのお礼ですわ」

「・・・そこまで言われるならお言葉に甘えさせていただきますか」

午後6時。ハヤトはスバルとミソラとスバルの部屋で話をしていた。

「スバル君って本当に宇宙が好きなんだね」

「はい。将来は宇宙飛行士になるんです」

「へえ、宇宙飛行士！でも、スバル君ならきつとなれるよ、きつと。フウン、こういうのを読んでいるのかどれどれ・・・」

ハヤトが本を一冊取り出そうとする隙間に挟まっていた何か落ちた。拾って裏返して見るとミソラの最新曲のアルバムだった。

「あ、これ私の・・・」

「この前母さんとデパートに買い物に行った時CDショップに立ち寄ったから買ってみたんだ（照）いい曲だね」

「あ、ありがとう／＼」

（私のファンがこんなにも近くに来てくれたんだ・・・）そう思うとミソラは嬉しくてならなかった。

「ハヤトさんはウィザードを持っているんですか？」

「ああ、一応ね。エレメント出ておいで」

するとハヤトのハンターからポケ　ンのシェ　ミランドフォルムを模したウィザードが出現した。

「わあ！可愛い！」

「設計からプログラム挿入まで一部始終一人でやったんだ。あんまり大声で言える事じゃないけど自信作だよ。今じゃ家族みたいな存在さ」

『とか言って名前決まったのは今日の午前中だったり・・・』

「おいエレメント。今そんな事言わなくてもいいだろ」皆が笑った。

「そういえばミソラちゃんはどうしてスバル君の家に住む事になったんだい？」

「あ、それ僕も聞こうと思ってたんだ」

「うん。それはね・・・今まで一人でマンション住まいだったんだけどそれじゃやっぱり寂しいからマネージャーさんに相談したの。

そしたらスバル君の家はどうだろうってお母様と話合ってもらってOKが出たから今日来たって訳。転校してきたのも大体同じ理由だよ」

「そうだったんだ」

「しばらく一人暮らしの生活が続いてたので・・・癖になつてしまつたものです」

その後黙々と食べ続けたハヤト。ミソラは貪欲なのかあつという間に三杯もお代わりした。その食欲にスバルもあかねも驚いていた。

「そんなにたくさん食べて大丈夫なのミソラちゃん!？」

「全つ然平気だよ スバル君が小食なんじゃない？」

「まあ確かに二人とも成長期ですからね」

そんなこんなで楽しい話をしていた矢先、あかねが口を出した。

「ところでミソラちゃん。これから一緒に生活するんだから私の事をお母さんつて呼んでくれるかしら？」

それを聞いたミソラはスプーンを動かす手を止めた。

「えっ、いいんですか？」

「勿論。我が家で一緒に生活するなら家族も同然よ」

(我が家・・・家族・・・!!)

ミソラは表情を崩して泣きだした。

「ほ・・・本当にいいんですか？」

「ええ。今まで良く頑張つたわね」

「(えっ!?)」あかねとミソラの本当の母親の笑顔が重なつた。

「グス・・・はい、これから宜しく願いますお母さん・・・

それと、スバル」

「えっ!?!」今度はスバルが驚き慌てた。

「ミソラちゃん、今何て？」

「私達もう家族だし恋人でもあるんだから呼び捨てでもいいよね」

「いや・・・うん、いいよミソラ」

『何か仲間外れですねハヤト』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『ハヤト?』

ハヤトは小刻みに体を震わせていた。

「あの、ハヤトさん、どうかしましたか？」

「……左手がつりました」

それを聞いた瞬間、スバル、ミソラ、あかね、ウォーロック、ハ
ブ、果てはエレメントにまで笑われた。

「／／／／／／／／」

スバル達とは別の意味で恥ずかしくなった。

「ハア、ま、御馳走様でした。いや、色々ご迷惑をおかけしました」

「ご迷惑なんてそんな。また機会がありましたらいつか」

「とりあえず御好意だけ受け取っておきますよ。それではまた」

ハヤトが玄関のドアを開けようとするタイミング良くスバルの父、
大吾が帰って来た。

（！！大吾さん……）

「あれ、君は……？」

「……失礼」有無を言う間もなくハヤトは立ち去った。

「おかえりなさい大吾さん」

「おかえりなさい父さん」

「お、おかえりなさい」ミソラだけが少し緊張している様だった。

「ああ、おかえり。それと宜しくなミソラ」

「えっ」

「家で生活する以上、家族も同然だからな」

「はい……宜しくお願ひします」

「おう、こちらこそ宜しくな」

「あのね、大吾さん。スバルったらミソラに告白したんですって」

「ほう、スバルもなかなかやるものだな」

「っ母さん！父さんまで！」

「これからが楽しみね」

「もう！」

「／／／／／／／／」

「ところで茜、さっき急に出ていったあの青年は誰だ？」

「ああ、彼は最近お隣に引っ越してきたハヤトさんよ」

「そうか・・・」と大吾は何か思わせぶりの表情をした。

「どうしたの父さん？」

「あ、ああ・・・彼に以前どこかであった様な気がしたんだがな」

「彼、本当にバイオリンが上手かったのよ。大吾さんにも聴かせてあげたかったわ」

「ああ！そういうえばハヤトさんバイオリン置いていつちやったよ」

「じゃあスバル、ハヤトさんに届けてあげなさい。この後展望台に行くんでしょ？」

「うん。ミソラちゃんも行く？」

「うん、行く行く！」

「じゃあ行つてきまゝす」

「はいいつてらっしゃい」

初夜（後書き）

随分時間かかった。それにしても台詞が多いなあ。
愚痴ばかりですみません。

ご意見、ご感想等お待ちしております。

すれ違い

スバル達が展望台に行こうとしていた少し前、

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

ハヤトは自分の家の玄関で汗だくになっていた。

『ハヤト、一体どうしたんですか？さっきからずっと体が震えてますけど』

「いや、こんなに薄着だからな、さすがに春でも体が冷えたんだろう」

が、そんなハヤトの言い逃れはエレメントの一言で切り捨てられた。

『嘘つき』

「何？」

『ハヤト、食事の時に「手をつた」って行った時からずっと震えてましたよ。一体何があったんですか？』

「ちよつと昔にな・・・」

(あの時のトラウマ・・・まだ抜け切れていない様だな・・・)

『本当は今話してほしい所ですけど5日ハヤトの方から話してくれる事を信じてあえて聞かない事にします』

「そうしてもらえると助かる。さて、展望台に行くかな・・・あ、そうだ」そういうとハヤトは二階に上がって十秒を数えないうちに玄関に戻って来た。

「よつし、行くか」

一方、スバルとミソラはハヤトの自宅のインターホンを押してみたが、まあ当然だが返事がない。

「いないみたいだね」

「何処に行っちゃったんだろう」

「もしかして探さなきゃいけないのかな？」

『その必要はなさそうだが』ウォーロックがウィザード・オンした。

「どうして？」

『展望台の方から奴のウィザードの周波数を感じる。奴も多分そこにいるだろう』

「行くぞ、ミノラちゃん」

「・・・うん」

この時ミノラの表情が微かながら曇っていた事にスバルは気付かなかった。

展望台で

展望台に着くと確かにハヤトはいた、だがどこか悲しそうに見えた。左手にノートを持って右腕を鉄柵に任せ手には写真を持っていた。

「チサト・・・必ずお前を助けてやるからな・・・」

写真に写っていたのは幼なき頃のハヤトと髪の毛の長い仲良しに見える女の子だった。

二人が呼びかけようとする直前に、

「二人とも来たんだね」と振り返りもせずに行った事に二人は度肝を抜かれた。

「どうして僕達だつて分かつたんですか？」

「君達の足音を何度か聞いているし、スバル君なら恐らく毎日ここに来ているのではないかという簡単な推測さ」

「すごい」

「あの・・・バイオリンを置いていったままだったので持って来ただけですけど・・・」

「わざわざ届けてくれたのかい？どうも有り難う」

「いえ、どういたしまして」

「よし。お礼と言っちゃ何だけどこれをあげるよ」そう言って左手に持っていたノートを差し出した。

「何ですかコレ？」

「日記帳だよ。二人で交換日記でもやってみたら？」

「いいんですかいたただいちゃって」

「いただくなんて固い言い方しないの。貰うでいいんだよ、貰うでじ、じゃあ貰っておきます」

「そうそう。じゃあ僕はそろそろ帰るから。何か相談したい事とかあったら家においでよ」と展望台の階段を下りているところに

「ハヤトさん」とスバルが声をかけた。

「ん……何だい？」

「その……僕とブラザーになつてくれませんか」

「スバル君とブラザーに？」

「はい……いや、やっぱりいいです。いきなりであつかましかつたですよね……」

ところが予想に反してハヤトは、

「いいよ」

「えっ、いいんですか？」

「別に問題はない。ブラザーは多い方が良いでしょう？」

「はあ……まあ……」少しずれているハヤトに少々戸惑いながらも二人はブラザーを結んだ。

「じゃあね。二人ともごゆっくり」そのまま静かな風のようにハヤトはその場から立ち去った。

「ねえスバル」

「何ミソラちゃん？」

「さっきどうしてハヤトさんとブラザーを結ぼうなんて言ったの？」

「以前の僕に似ていたんだ……」

「？」

「ミソラちゃんと初めてブラザーを結ぶ前の自分、寒きこんで学校にも行かずに人関わるのを怖がっていた自分。ちよつと違つかもしれないけどハヤトさんも似たような心境じゃないのかなあって思ったんだ」

「スバル君も同じ事を考えていたんだね」

「じゃあミソラちゃんも……」

どんよりと重たい空気に包まれてしまったその場。当然こんな雰囲気など一秒でも早く抜け出したいに決まっている。

「ミ、ミソラちゃん。空を見てみなよ」

「え……」

空は若干雲がかかっていたが星を見るには充分だった。

「綺麗だね」

「そうだね、でも」とスバルは一瞬間をおいて、

「ミソラちゃんの方が綺麗だよ／＼」

「えっ／＼」

「本当に・・・そう思った」二人の顔が赤い。

『ようよう、お前ら顔が真っ赤だぜ』

『はいはいウォーロック、あなたはこっち』

『おいっ放せ！おいスバル助けてくれ～～～～ギヤ～～～～』

それから数分間、二人は何も話さなかった。否、話せなかった。

「あの、ミソラちゃん」

「な、何？」

「そろそろ帰らない？さすがに寒くなってきたし」

「うん」

「ねえ、スバル」

「え、何？」

「その・・・手、繋いでもいいかな？」

「え／＼／＼」

「嫌？」

ミソラの上目遣いに対してスバルがNOと言える訳がなかった。

「い、いいよ／＼」

「やった」

ギュッと握りしめた二人の手にはほんのりとした温もりが生じていた。

「温かいね」

「そ、そうだね」

「じゃあ帰ろう」

御機嫌になったミソラに引っ張られる形になったスバル。
が、階段を踏み外してしまい・・・

展望台で（後書き）

今回はあえて中途半端なところで止めています。

嬉しい(?) 事故(前書き)

今回と次話はかなりグダグダ&ドロドロしています。
それが苦手な人は読まない事をお勧めします。

嬉しい(?) 事故

スバルが展望台の階段を踏み外しミソラに覆いかぶさった。いわばスバルがミソラを押し倒した状態になっているのである。

(ど、どうしよう・・・事故とはいえミソラちゃんを押し倒しちゃった・・・とりあえず謝るべきだよね)

(ど、どうしよう・・・事故とはいえスバルに押し倒されちゃった・・・でも嬉しかったなあ・・・)

さすがにずっとそのままにいる訳にもいかず、

「う、ごめん。すぐどくから・・・」

帰り道、二人は手を繋いでいたものの顔を合わせていられなかった。

家に着くとスバルは

「ミソラちゃん、さっきは押し倒しちゃってゴメン!!」

スバルがあまりに深々と頭を下げるのでミソラの方が戸惑った。

「謝らないでスバル」

「えっ」

「あれはわざとやった訳じゃないんだし、それに・・・ちょっと嬉しかった恋人に押し倒された事が・・・」

その言葉を聞いた途端にスバルは固まってしまった。

「あっスバル・・・もうスバルったら・・・」

ミソラは手の平に息をハアアッと吹きかけるとスバルの頬を思いつきり引つ叩いた。

バツチイイイーン!!!!!!これでもかという位スカツとした音だった。

「いったあああああいつ！」

当然だがスバルには激痛が走った。

「あ、あれ？僕一体……」

「もう！家入ろうスバル」

「う、うん（何でミソラちゃん不機嫌なんだろう？）」

「ただいま」

「おかえりミソラ、スバル。お風呂の準備できてるから順番に入つて」

「ミソラちゃん、先に入る？」

「うん、じゃあ先に入るのかな。覗いたりしないでよ」

「し、しないよ……」

「フフ、冗談、冗談」

それからのスバルは何故か宿題も出ていなかったのてただ部屋の中にいた。

その頃、

『おいハーブ、俺はいつた何時まで此処（今はスバル家の屋根）にいなきゃいけねえんだよ』

『そうねえ、あつ私スバル君に話しておきたい事があつたんだわ。という訳でもう少し此処にいなさい！』

『チツ、分かったよ』

『アラ、あなたも変わったわね』

『何だよ、俺が変わるのが何か変だつて言うのかよ！？』

『べ〜つにい〜。ちよつと試つてみただけよ』

そう言い残しハーブはスバルの部屋に入った。

『ポロロン、スバル君チヨットいいかしら？』

「あ、ハーブ。まあいいけどロツクは何処？」

『今屋根の所にいるわ。で少し長くなるけど話しておきたい事があるの。まずミソラはスバル君の家に住む事が決まってるからずっと今日が来るのを楽しみにしていたわ。それまあ出家族がだれ一人いなかったから相当寂しかったんでしょね。次に二人が告白した事によつて一応恋人関係は成立したわ。けど今この事を知っているのは御両親とハヤトさんだけ。まあ、彼は口外する様な人ではないと思うけどね・・・ちなみにミソラの仕事はマネージャーさんが少し学校生活に慣れてから始めた方が良いつて事で余裕を持たせて一週間後からという事になっているのね。』

「うん。大体話は分かったけど・・・それで？」

『（うゝん、ちょっと難しかったかもしれないけどヤツパリ鈍いわね）そこから後はあえて言わないわ』

「ええ！」

『あとはスバル君次第よ』

そう言うともたもハーブは何処かへ行ってしまった。

「ハーブ何が言いたかったんだらう？」イマイチ分かっていないスバルだった。

そこへ、

「スバル、お風呂開いたよ」とミソラが入って来た。

「分かった」と自分の着替えを持って風呂場へ向かうスバル。この時彼には知る由もなかっただらう。これから大変な試練が待ち受けている事に。

二人の夜

スバルが風呂からあがってからは、部屋でミソラと最近の話題を中心にして話をしていた。
そこへ茜が入って来た。

「二人ともすっかり仲良しさんね」

「はい」

「フフ。ところでミソラ、寝る場所なんだけど、スバルの部屋でいいかしら？」

「はい、別に構いませんけど……」
これにはスバルが慌てた。

「ちよつ……ちよつと待ってよ母さん。ミソラちゃんが僕の部屋で寝るんだったら僕は何処で寝たらいいの？」

「アラ、いつも通り自分の部屋で寝たらいいじゃない」

「じゃあミソラちゃんの布団持ってくるよ」

すると茜はまるでスバルがそれを言うのを待っていたかのように、
「それがね……実は予備の布団を用意するのを忘れていたのよ」
「だつ……だつたらベッドをミソラちゃんに譲って僕は床で寝るよ」

この時茜とミソラは同時に

(スバル(つたら)(つて)ホント鈍感(よね)(だな)(
))
と思った。

このまま待っても恐らく感ずかないだろう、そう判断したミソラは
思い切って言うてしまった。

「あの……スバル……一緒にベッドで寝ない……？」

「ああ、一緒に寝る………つてエエエエ………
~~~~~!?!?」

そんな提案が出されるなんて事を微塵も考えていなかったスバルは

予想外の事態に驚いた。

「ダ・・・ダメだよ」

「どうして・・・？」ミソラは涙目（勿論演技の）になっていた。

（ミソラちゃんの泣き顔なんて見たくない・・・でも、僕の理性がどこまでもつか分らないし、もしそれが切れてミソラちゃんを傷つけちゃったりしたら・・・）

スバルのそのハッキリしない態度に憤慨してウォーロックとハーブがワイザード・オンした。

『オイ、スバル！一緒に寝ること位でグダグダ言っな！』

『そうよ！お互い告白までしたんだからそのくらい大した事じゃないでしょ！』

「で、でも・・・」

「スバル・・・私と一緒に寝るのは嫌？」涙目に上目遣いが加わった。そして遂にスバルは折れた。

「わ・・・分かったよ」

「じゃっ、決定ね。二人とももう遅いから寝なさい」時計を見ると既に10時を回っていた。

「私パジャマに着替えてくるね」

「うん」

ふう、とスバルは溜息をついた。

『おい、スバル』

「なに」

『ホントは嬉しかったんだろ？』

「何が？」

『あの女と一緒に寝る事ができて』

「ロック・・・僕をからかっているの？」

『さあな・・・』

そこへミソラが入って来た。

「エヘヘ。スバル、どう、似合ってる？」

その姿にスバルは見惚れてしまった。ミソラは自らのイメージカラーをモチーフにしたピンクのパジャマを着ていた。

「う、うん。すごく似合っているよ、ミソラちゃん」

「そう？良かった。これ、スバルの家に引っ越すことが決まってから、ハーブと一緒に選んだんだよ。さっ、早くベッドに入ろう」  
「う、うん／＼」

その頃、部屋の外では・・・

「スバルもやつと観念したわね。ロック君もハーブちゃんも協力ありがとう」

『気にするなよオフク。このぐらい大した事じゃねえよ』

『他ならぬミソラとスバル君の為ですから』

そう、全て仕組まれていた事だった。あかねは夕食が終わったあと、二人が展望台に行く事を見越してウォーロックとハーブに協力を頼んだ。二人（？）はあっさりと了承した。尤も、ウォーロックは二人の反応を見て楽しもうとしていただけだがハーブは殊の外真面目だった。

さて、当の二人は・・・

何とか布団に潜り込んだもののお互い寝られずに話をしていた。

「スバルってあったかいね」

「そ、そう？」

「うん・・・ゴメンネ」

「？何が」

「スバルの家と一緒に生活する初日から色々我儘言っちゃって。私今まで本当に寂しかった。ママがいなくなっただけで私の傍にいてくれる人が誰もいなくなっちゃった。・・・グス・・・でも、スバルの家に引っ越すことが決まった時は本当に嬉しかった。やっと・・・」

やっと一人の寂しさから解放されたんだって……ヒック……グス……」

(ハーブの言ってた通りだ。何でもなさそうに装ってはいるけど、なんだかんだ言って寂しかったんだね……)

何を思ったのかスバルはミソラをそっと抱きしめた。

「ス、スバル……!？」

「ミソラちゃん、大変だったんだね。今まで良く頑張ったと思うよ。僕も父さんが行方不明で心を閉ざしていた事があったから全部とは言いきれないけどミソラちゃんの気持ち分かる気がするんだ。

でも……もう君は一人じゃない。僕がついてる。それにこれから一緒に生活していくんだからここを自分の家だと思っていいいんだよ」

「スバル……本当にいいの？」

「うん」

それを聞いた途端にミソラは泣き出してしまった。

「え……ちよっと……僕何か変な事言っちゃった？」

「ううん。そうじゃないの。嬉しかったんだよ。ここまで……ここまで私を受け入れてくれるなんて思ってたから……ウワア~~~~~ン……」

いつの間にかスバルの胸に抱きついていた。数分後、一応泣き止んだ。

「大丈夫？」

「うん、もう平気……」

「じゃあもう寝よう？」

「待って」

「その……今日最後に一つだけお願い聞いてくれるかな？」

「何？」

ミソラは頬を赤らめながら言った。

「キスして」

「ええ〜！？／＼／＼／＼／＼」

「嫌？」

再び泣きそうになるミソラ。これ以上ミソラにないで欲しくなかったスバルは覚悟を決めた。

「いいよ」

ミソラは目を閉じてゆっくりと顔を近づけた。そして二人の唇は重なり、二人を映していた影は数秒間一つになっていた。

「ありがとう／＼／＼／＼」

「ど、どういたしまして／＼／＼／＼」

「じゃ、おやすみ」そう言うと直ぐにミソラは眠ってしまった。

スバルは再びミソラをそっと抱き寄せた。

「僕は絶対に君を一人にはさせない。そして君を絶対に離さない。どんな事があっても僕は君の傍にいるよ・・・おやすみ、ミソラ」そして布団をかぶって目を閉じた。

（さっきのスバル、カッコ良かったなあ・・・）

前言撤回、ミソラは寝たフリをしていた。

「ありがとう、おやすみ・・・」スバルの頬にキスしてミソラも眠った。

その直後にハーブがウィザード・オンした。

ミソラは幸せそうに寝息を立てていた。

（ありがとう、スバル君・・・）

そう心で呟いてハンターに戻った。

## 二人の夜（後書き）

自分で書いという言うのも何ですが、イヤ恥ずかしい・・・  
こんな駄作でも目を通していただけたら幸いです。

## ミソラの真心

翌日、ミソラが目を覚ますと、時刻は6時20分だった。仕事から早起きには慣れていった。

茜と大吾は既に起きていた。

「おはようございます・・・お、お父さん、お母さん」

まだ少々慣れていない様だった。

「おはよう」

「おはようミソラ。そんなに固くならなくてもいいのよ。徐々になれていけばいいわ」

「は、はい」

「じゃあ二人とも、俺はそろそろ行くぞ。朝一でミーティングがあるからな」

「いつてらっしやい大吾さん」

「ああ、行ってきます」

「お父さんもお母さんもまだまだ若いんですね」

「当然よ」茜は上機嫌だった。

「さて、朝御飯を作らなくっちゃね」そう言って茜は台所に入った。いった。

ミソラはモジモジしながら尋ねた。

「あ、あの・・・」

「あら、何かしらミソラ？」

「そ、その・・・スバルの分のご飯、私が作ってもいいですか？」  
「いいけど、どうして？」

ミソラは恥ずかしがりながら昨夜の事を話した。

「ふうん。スバルも中々やるわね。分かった、スバルの分は任せるわ」

「はい！ありがとうございます」



ミソラはスバルから掛け布団を引つ剥がすと後ろから抱きついて、  
「スバル、起きて」と非常に甘い声で囁いた。

「へっ!？」突然甘い声で囁かれたスバルは一気に眠気を吹き飛ばされた。

「ミ、ミソラちゃん!？な、な、何してるの」

「スバルが中々起きないから起こしに来てあげたんだよ」

「そ、そうなの」

「それより早く着替えてご飯食べよう」

「う、うん」

「早く来てね」そう言つて階段を駆け下りていった。

「何かあるのかな？」疑問に思いつつも着替えて1階に行く。

「おはよう、母さん、ミソラちゃん」

「おはようスバル」

「ほらスバル、こっちだよ」とミソラが腕を引つ張り、椅子に座らせた。

スバルはようやくミソラのハイテンションの訳を理解した。

「もしかしてこれミソラちゃんが？」

「うん。スバルの為に作つてみたんだ。気に入ってもらえると嬉しいんだけど……」

「有難うミソラちゃん。いただきます」

まず最初に手のこんだと思われるスクランブルエッグを食べた。ほんわかとした温かさとミソラの思いが伝わって来た。

「美味しい!凄く美味しいよミソラちゃん」

「ホント?良かった気に入ってもらえて」

「良かったわねミソラ。スバルに喜んでもらえて」

「はい!」

「フフ、こうして見ると二人とも夫婦みたいね」

「え!」「な!」二人の顔から火が出た。

スバルは残りの朝食を素早く、かつ味わいながら逃げる様に自分の

部屋へ行ってしまった。ミソラも追いかけるように二階へ上がった。  
「さてスバルとミソラ、これからどうなっていくのかしら」

さて部屋に入ってスバルは、はつとした。そして昨日のハーブの話  
を思い出した。現時点でミソラが自分の家にいる事を知っているの  
は父と母、そして隣に住んでいるハヤトの三人。だが、いつも通り  
委員長達が迎えに来たら、この事を隠し通す事等到底できない。そ  
れに恋人関係が知られたりしたらそれこそ想像のつかない事態にな  
りかねない。

そんな事を考えているとタイミング良くミソラが部屋に入って来た。  
いい機会だと思ったスバルはミソラにこう言った。

「ミソラちゃん。出来れば学校の中で呼び捨てにするのは止めてく  
れないかなあ」

「え、何で？」

「いや、学校の皆から変な誤解をされたくないから」  
「ん~~~~~」

『ミソラ、その位の事だったらいいんじゃないかしら？あえて彼氏  
の要望を聞くことも大事な事かもしれないし』

「しょうがないな」

そんな訳で一つ目の問題は解決した。ミソラが自分の家にいる事を  
どうやって知られないようにするか。これを言ってしまうのはいさ  
さか躊躇ったが時間的に迷っている余裕はなかった。

「それからミソラちゃん。その、言いにくいんだけど、僕と学校に  
行く時間を少しずらしてくれないかな？」

予想していた通り、ミソラは涙目になった。

「やっぱりスバルは私と一緒にいるのは嫌なの？昨日言った事は嘘  
だったの？」

「嘘じゃないよ。ただ、この事が知られちゃうと僕もそうだけどミ  
ソラちゃんが大変な事になっちゃうし。それに委員長達が来たら怖

いし」ところがミソラは

「な〜んだそんな事か」と意外な反応をした。

「そういう事なら心配要らないよ。私が事情を説明してあげるから  
「本当？」

「うん。私を信じて」

やや半信半疑だったものの信じる事にした。

『ポロロン、お二人さん。そろそろ時間ではなくて？』ハンターの  
時計は8時をさしていた。

「じゃ、行こうか」

「うん」

「スバル〜、ミソラ〜、そろそろ時間よ」

「は〜い」

『ケツ、またいつもの退屈な時間の始まりかよ』

『アラ、退屈ならアタシがつきあってあげるわ』

『け、結構だ。お前に絡まれるほどの事じゃねえ』

『ウフフ、遠慮なんか要らないからね』

『ス、スバル、おい、スバル〜〜助けてくれ〜〜！！オレをウ  
イザード・オフしろ〜〜！！』

ウォーロックの必死の叫びもスバルには届いていなかった。

## 予想通りの展開

「おはよう、みんな」

「おはよう、ルナちゃん、ゴン太君、キザマロ君」

「おはようって、エエ~~~~~!!!!!!」  
「やはり反応は予想通りだった。」

「な、なんでミソラちゃんがスバルの家から出て来るんだ」

「私、昨日からスバル君の家で生活する事になったの」

「おい、どういう事だスバル、説明しやがれ」

「そうですね説明してください」

「お黙り!!二人とも!!」

「ヒ~~~~~」  
「スバルまでもが震えた。」

「ほ~~~~か~~~~わ~~~~くん、どういう事なのかしら~~~~」

「ルナちゃん、そういう事ならスバル君じゃなくて私に聞くべきじゃない?」

「ミソラちゃんには聞いてないわ。私はスバル君に聞いているの」

「だって私スバル君に事情を話してないよ」

「(えっ!?)」

「み、みんな。早く行かないと遅刻しちゃうよ」

「な、なんか納得しきれないけど、委員長として遅刻する訳にはいかないわ。行くわよ」

三階廊下にて、

「ミソラちゃん、何であんな嘘ついたの?」

「だってスバル君が大変そうだったから。嘘も方便っていうでしょ?それともあのまま何も言わない方が良かった?」

「(確かにあのままだったら僕が大変だったろうなあ・・・)ううん、助かったよ、ありがとう」

「どういたしまして」  
「そう言ってミソラは教室に入ってしまった。」

「とはいえ、委員長達にどう説明しようか・・・」

『あいつに相談すればいいんじゃないかねえか？』

何処からかウオーロックが現れて行った。

「わあ！ちよつとロック、脅かさないでよ」

『ああ、わりい、わりい』

「全く・・・で、ロックの言うアイツって誰？」

『ホラ、昨日家に来た髪が青くて片目隠してた・・・』

「ハヤトさんの事？」

『そう、ソイツだ。ほら、昨日相談したい事や悩み事があつたら来いとか言つてたたる？』

「うん、そうだけどどうしてその事を知っているの？確か、ロックつてその時ハンターにいなかったよね」

『オフクロの話聞いた後にハーブに様子見を命じられたんだよ』

「というよりロックつて事あるごとにハーブに連れ去られている様だけど一体何処で何されているの？」

『オレの口からはとても言えん』

それ程の事なら余計気になるものだがあえて聞かずじまいになった。

「でも確かにハヤトさんなら相談に乗ってくれるかもしれないな。

よし、メールしてみよう」

「ハヤトさん

急な事ですいません。ちよつと相談に乗ってほしい事があるのですが宜しいでしょうか？

今日の午後4時頃、少し時間を頂けませんでしょうか？

「

メールを送信した時、ホームルーム開始のチャイムが鳴った。

追いつめられたスバル（前書き）

遅くなって大変申し訳ありません



ぎるんじゃないの」

「委員長！！」

その一言にスバルはキレた。

「なんでツそんな所にまで一々口を出してくるんだよ！！そんなこと言われる筋合いはないよ！！」

そう言ったつきりスバルは家に帰るまで一言も喋らなかつた。ミソラが話しかけても一切反応しなかつた。

「ただいま」言う事自体が面倒くさいというのがはっきり分かる声で言った。そして無言で二階へ行ってしまった。

「スバルったら一体どうしたのかしら。ミソラ、何か知ってる？」

「さ、さあ。私が見た限りでは何も起こってないと思うんですけど言ってしまうのは簡単だったが、嬉しさや驚愕の感情から何となく話す気になれなかつた。

「そう。じゃあ放っておきましょう。そういう年頃でもあるしね」

「何か凄く二階に行きずらいなあ・・・」

そこであかねは別の話題を出した。

「あ、そうそう、今日買い物に行った時にあのコに会ったのよ」

「あのコって誰ですか？」

「ハヤトさんの傍にいたコよ。名前何て言ったかしら」

『もしかしてエレメントの事ですか？』ハープがウィザード・オンして言った。

「ああ、そう。確かそんな感じの名前だったわ」

「あのコがどうかしたんですか？」

「今日買い物に行った時に偶然会ったの。でもウィザードだけで買い物なんて珍しいと思って理由を聞いてみたの。そしたらハヤトさんが熱出しちゃったんですって」

「えっ！？ハヤトさんが熱出したんですか」

「まあ微熱らしいんだけどね。で、話を戻すと、どうして薬屋に行

かないのかって聞いたたらハヤトさんって薬を飲まないらしいから梅干しを買いに来たんですって。それでお使いに行くなんて偉いわねって言ったらエレメントちゃん何って言ったと思う、ハープちゃん？」

「え、私ですか？え」と、うぐん良く分かりません」

「私はハヤトと一緒にいる時がとっても幸せなんです。だからこの位何でもありません」だって。うぐん、しっかりしてると思ったわ」

所変わってハヤト宅では―

「ハヤト、大丈夫ですか？」

「ああ。朝に比べたら大分楽になったよ」

「でもまだ寝てて下さい。今梅干し湯を作りますから」

「悪いな。何から何まで」

「気にしないでください。困った時はお互い様ですよ」

そう言うと下へとんでいった。

「（俺はアイツに何もしてやれてないな。名前だって決めたその時にどうして教えてやらなかったんだ・・・）」

そんな事を考えているとお盆に梅干し湯を入れたお椀と箸を乗せて持ってきた。

「熱いから気をつけてくださいね」

「ああ」

お椀から出る湯気をフー、フーと吹きながらゆっくり梅干し湯を飲んだ。

「ハアー、随分落ち着いたな。エレメント、もう少し寝ているから1時間後に体温計持ってきてくれ」

「はい・・・あの、ハヤト」

「ん、何だ？」

「ちよっと外に出てもいいでしょうか？少し風を浴びてきたいので」

「ああ、構わないよ」

エレメントが外に出ると心地よく涼しい風が優しく草木を揺らしていた。空は雲一つない快晴の日だった。

『はあ、今日は本当にいい天気ですね。星が綺麗に瞬いていますね。もしハヤトが元気だったら、「おお、綺麗な星空だなあ」とか言って夢中になっているでしょうに・・・』と苦笑した。

そこへ昨夜の様にスバルがとミソラがやって来た。因みにスバルが二階に行ってからどうしていたかというのと、ふと床に横になった途端に眠ってしまい、帰り道での出来事を一切を忘れてしまった。だから不機嫌になるならぬもなかった。

「あ、エレメント。ハヤトさんの具合はどう？」

『はい、お陰様で熱も下がって大分楽になりました』

「何でここにいるの？」

『ちよつと風を感じたいと思ひまして。一応ハヤトにも話はしておきましたし。それよりもお二人は何処まで行っただんですか？』と柄にもなさそうな事を聞いてみた。

当然二人は赤くなつた。面白くなつたエレメントはちよつとからかつてみる事にした。

『もうファーストキスはしたんですか？』

「そ、そんなまD「うん、しちやつた」とスバルの言葉を遮つてミソラが言った。

「ちよつ、ミソラちゃん（焦）・・・」

「だってホントの事だもん」

『そうですか。これからお二人展望台に行くのでしょうか？フフ、楽しんできて下さいね』

そして家に戻っていった。

「・・・じゃ行くか」

「うん」

先程も書いたが、今夜は雲一つ無い。天体観測にはもってこいの日だった。

「昨日以上に星がよく見えるね」

「ホントだね」

「・・・」

「スバル？」

遅かった。既に彼の眼中には星空以外のものは映っていない。みそらはここでようやくウォーロックが展望台に行きたがらない訳を理解した。彼にとつての大切な時間を害してしまうのは悪い気もしたが、それよりも自分を無視している（あくまでミソラの一方的な見方だが）事に対しての怒りの方が強かった。

「ス・バ・ル！！！！」

「えっ、何ミソラちゃん？」

「もうスバルなんか知らない！」

スバル視点から言えばただミソラと一緒に星を見ていただけなのに何故ミソラが起こっているのか分からない、というところだろうか。

「ちよつと待つてよミソラちゃん。何で怒っているの？」

「離してよ、スバルなんかずつと星を眺めてたらいいじゃない！」

ああ、そういうことかとスバルは自信に頷いた。そして手を掴もうとして振り払おうとする反動を利用して振り返ったミソラを抱きしめた。

「ゴメンネ。僕は星の事になると周りが見えなくなっちゃんだ。でも、これからは気をつけるよ。だから機嫌直して、ね？」

ミソラはそれでもまだ不機嫌そうな顔をしている。

「・・・ただじゃ許さない」

「じゃあどうすれば・・・」

「今週の日曜日にデートして」

「デ、デート！？・・・うん、うん、いいよ」

「うん、じゃあ許してあげる さっ、そろそろ帰ろ」  
「うん」

そしてまたお互い顔を赤らめながら手を繋いで家に帰った。

## 感謝のキモチ

二人が家に帰って十分ほどした頃、

『そろそろですね』

エレメントは体温計を持って二階にいった。

『ハヤト、起きて下さい。1時間経ちましたよ』

「ん？んああ、そうか。もうこんな時間か」

『体温計持ってきましたよ』

「ああ、有難う」

脇に挟んでふう、と溜息をつく。1分後、ピピピツと音が鳴った。

「36.6。良かった、平熱に戻った様だな」

『ハア、良かったです。ハヤトが元気になったみたいで』

「ホントに助かったよ。有難うエレメント」

『気にしないでください。一緒に生活している以上、困った時はお互い様です』

時刻は9時28分。寝るにはまだ早い。

「よし、何か弾くか」

『ちよつとハヤト。病み上がりなんですから無茶しないで下さいよ』

「ああ。だから今日は1番だけさ。曲は、そうだな・・・空も飛べるはず」

ところ変わってスバル宅スバルの部屋。スバルは現在風呂に入っている。二階にはミソラしかない。

『ア〜ラミソラ、何してるのかしら？』

「あ、ハープ。今日記を書いてるんだよ」

『日記って何かしら？FM星では聞いた事がないわね』

「日記っていうのは、何て言えばいいのかな、その日にあった嬉しかった事とか悲しかった事とかを書き残しておくものだよ」

『フーン、そうなの。誰かから貰ったの?』

「うん。昨日展望台でハヤトさんに貰ったんだ」

『そうなの。で、何が書いてあるのかしら?』

「ちょっと見ないでよハープ。まだ書いている途中なんだから」

『もしかしてスバル君の事でも・・・』

「違っつてばハープ」

『違っていたとしてもどうしてそんなに大声で否定する必要があるのかしら?』

「うっ・・・」

『凶星ね』

とそこへギターの音が聞こえてきた。

「あれ?誰か弾いているのかな」

『カレね』

「ハヤトさん?」

『そうみたいね。隣から聞えてくるから』

「幼い微熱を下げられないまま 神様の影を恐れて

隠したナイフが似合わない僕を おどけた歌で慰めた

引き寄せながら ひび割れながら 輝く術を求めて

君と出会った奇跡が この胸に溢れてる

きっと今は自由に空も飛べるはず

胸を濡らした涙が海原に流れたら

ずっとそばで笑っていてほしい

「

そして静かなギターで終わった。

「ハヤトさん、バイオリンだけじゃなくてギターも上手かったんだね」

『そうね。まあ、ミソラには及ばないけどね』

「……」

『どうかしたのミソラ？』

「うん、ちよつとね……」

そこへスバルが入って来た。

「あゝサツパリした」

「……」

「アレ、どうかしたのミソラちゃん？」

「え、いや、何でもないよ」

「……そう」

P r r r ! P r r r !

スバルのハンターに電話がかかってきた。ハヤトからのものだった。

「あ、邪魔だったかな？」

「いえ、そんな事はないですけど。それよりハヤトさん、体はもう大丈夫なんですか？」

「うん、お気遣い有難う。エレメントが薬作ってくれたから大分良くなったよ」

「そうですか。よかったです」

「そうそう、そういえば今朝方メール送ってきたけど相談事って何かな？」

「あ、それは……」

「言い難いなら言い当てるあげようか。大方、ミソラちゃんとの同居生活及び恋人関係に納得しない友達がいて、その人達にどう説明したらいいだろう……ってトコじゃないかな？」

「ど、どうして分かるんですか!？」

スバルはあまりに的確なハヤトの推測に度肝を抜かれた。

「顔にそう書いてある・・・プツ、アハハハ、アハ、アハハハハハハハハハハハ・・・あ、失敬。」

じゃあ、明日の放課後にもおいでよ。明日はずっと暇だし」

「は、はあ。(というよりハヤトさんって仕事しているのかな)」

「今僕の事暇人とか思った？」

「い、いえ別に(鋭い!)」

「フーン、そう?ま、いいや。じゃあ明日待ってるよ。おやすみ」

何だか一方的に話されて一方的に斬られた気がしなくもないが、今更言ってもしょうの無い事だった。

一方、ミソラは自分の机で何かをしていた。いや、日記ならぬ交換日記をつけていた。

「ミソラちゃん、何してるの?」

「わあ、見ないでよノノノ」と手で覆い隠した。

「そういえば交換日記でもしてみればとか言ってたっけ」

「そうだよ。今日は私が書くから明日はスバルの番だよ」

何やら勝手に決められた様だが拒否する理由も無いので受け入れる事にした。

「よし、終わった。さ、寝ようスバル」

「う、うん」

ベットに入ると昨夜みたいにもたなるんだろうか、とスバルは思ったがミソラは何を思ったのか天井を見詰めたまま無表情だった。

「どうかしたのミソラちゃん?」

「・・・チョット昔の事を思い出してさ・・・」

「昔の事?」

「・・・ううん、何でもない。早く寝よ。じゃないと朝起きれなくなっちゃうよ」

「うん、じゃあお休み」

「お休みスバル」

そうは言ったものの中々寝付けなかった。

(明日全てを話してもらおうわ。HAYATO!!)

恐怖！怒りのオーラ（前書き）

意味の分からない題名だな〜コレ

## 恐怖！怒りのオーラ

さて翌日、スバルは6時に起きた。

『スバル、これからもこの調子で自分で起きてくれ』

「おはようの前に言う事がそれなの？」

『ハア？毎朝毎朝起こしているオレの身にもなれよな。やっと起きたかと思ったら「あと5分・・・」とか言っつて結局起きねえじゃねえか』

「静かにしてよロツク。ミソラちゃんが起きちゃう」

『そんな状態で良くそんなこと言えるな。オレが言うのもナンだがたいしたモンだぜ』

ウオーロツクの言うそんな状態とはミソラが一昨日の夜の如くスバルに抱きついている状態であつた。

お互い言い合つていたのでスバルはマツタク気がつかなかつた。わざとじゃないかと思えるほど余りに背中に回してある手の力が強いため、解こうにも解けない。

「ミソラちゃん、起きて」体を揺すつてみるが起きない。

『そんな蚊の鳴くような声で言つたつて聞こえる訳ねえだろ』

ゾクツッ！ウオーロツクは背後に殺気を感じた。機械の様にグギギと首を後ろに向けるとハーブが笑顔で（その背後に恐ろしいオーラを背負つて）いた。

『ハイ、ロツク。あなたは・・・引つ込んでナサイ！！！！』

反撃する間もなくウオーロツクはハーブによつて何処かへ吹っ飛ばされた。

『フウ、ちよつとスッキリしたわ』

「ハーブ、僕とミソラちゃんの事を気遣つてくれるのは嬉しいんだけど、あんまりロツクを虐めないでくれる？あれでも僕のウィザードなんだから」

『ポロロン、ごめんなさいねスバル君。分かつてはいるんだけど、

アイツが折角のムードを壊しそうになるとつい、ね……』

「あ、そうだ。ミソラちゃんを起こさなきゃ」

『その必要はないわよ』

「えっ？」

『ミソラ、もういいんじゃない？』

パチッ。

「アレ、ばれた!？」

「うわ。ミソラちゃん！一体何時から起きていたの？」

「スバルが起きた時からずっとだよ」

さすがプロ。演技はお手のものという訳か。

その後、朝食を食べ、委員長達に会わない様に先に学校に行った。

3人には申し訳ないとは思ったが。

- ハヤト視点 -

時刻7時14分

熱はひき、すっかり元気になった。

「はあ、今日は何しようかな？」

『くれぐれも体調を崩さないで下さいよ』

「分かってるよ。おおそうだ。作りかけのアレ作るか」

そう言ったっぷりパソコンのキーボードが休んでいる間は無かった。

『ハヤト、そろそろ休憩しましょうよ。もう12時ですよ』

「え、もうそんな時間？」

ハヤトが作業をしていた机には6枚のカードがあった。それぞれに何処かで見えた事のある紋章が刻まれていた。

「お昼どうしようか……トーストは一昨日食べたし……お茶漬  
けにするか」

お茶碗に適量にご飯を盛ってお茶漬の素をふりかけ、鮭の切り身とタラコを一切れのせてお湯をかける。至ってシンプルだ。

「いただきます」

いつも通り両手を合わせる事も忘れない。湯気に息を吹きかけつつ、サラサラとお茶漬をかきこんでいく。ついでに胡瓜か沢庵の漬物でもあればよかったが。

「ふー、御馳走様。さて続きやるか」と即座に2階へあがっていた。

元気なのは結構なのだが構ってくれない寂しさも同時に感じたエレメントだった。

それからのハヤトはずっとキーボードを叩きまくって手の感覚すら失うほどだった。

『ハヤト。チョットは休みましょうよ』

「ああ、そうだね。今何時？」

『3時です』

「もうそんな時間か。おやつあったっけな」

台所を散策してみたが一欠けらの煎餅も無かった。

「ハア」。昨日梅干し買わせた時ついでに頼んでおけばよかったな。後悔先に立たず」

諦めて演奏部屋に向かった。オレンジのレスポールを構えて適当に弾いていた。

『そろそろスバルさん達が来る頃じゃないですか？』

「フーン、そう」

忠告をさらっと受け流し、演奏を始めるハヤト。

ジャーンジャーンジャーン……ジャーンジャーンジャーン……

ジャツジャジャ〜、ジャツジャジャ〜、ジャ〜ン・・・ジャ〜ン・・・  
ジャ〜ン・・・

ピンポーン！ジャララララララ〜~~~~~~~~ン！ドンツ！  
！！！！

順番に説明するとインターホンの音。それによってハヤトの集中力が途切れ、変な音になった。更にそれによって不機嫌になったハヤトが壁に拳を叩きつけたものだ。

「ハア、ハア、ハア・・・エレメント。応対しておけ」

『ハイハイ』

- スバル視点 -

何とか学校にいる最中は委員長達をはぐらかしたスバルだったがそれももう限界にきていた。

「星河君。いい加減白状なさい。なんでミソラちゃんが星河君の家において、そいでいて恋人同士になっているのよ」

「そつだそつだ。さっさと説明しやがれ」

「そつですよ！」

今回は意地でも聞き出すまでスバルを開放する気は無いらしい。そんな中どうしてニコニコしているのか教えてほしいと思うくらい、ミソラは笑顔だった。そんな彼らの後ろを2人の少年がついてきていた。ツカサとジャックだ。何故彼らが同行しているのかという理由は至極単純、ルナに命令されたからだ。ツカサはニコニコしていたがジャックは見るからに嫌そうな顔をしていた。ジャックはサテラポリスとしての仕事があるのでいつもではないが普通の小学生の様に学校が終わったら後は自由時間という訳にはいかない。が、姉のクインティア曰く「あのコ（ルナ）には逆らえない」らしく今

回も例外ではなかった。

そんなこんなでハヤトの自宅に着いた。インターホンを鳴らすとジヤラララララ~~~~ンと変な音がしたと思ったら、2階からドントッ！！！！という物凄い音が聞こえた。咄嗟にミソラはスバルの腕にしがみついた。さすがのルナも少し震えた。暫くしてエレメントが出てきた。

「あ、エレメント」

『やっぱりスバルさん達でしたか』

「さつき2階で凄い音がしてたけど何かあったの？」

『ギターを演奏している最中に雑音が入ったのでハヤトが機嫌悪くしているんですよ』

「あ、それ分かるなあ。私もノっている時に邪魔が入ると凄く気分悪くなるもん」

『そうなんですか・・・あつ、やっと機嫌直つたみたいですよ』

ジャッジャジャン〜、ジャッジャジャン、ジャッジャジャン、ジャ〜ン！

2階からハヤトが降りてきた。

「やあ、いらっ・・・しゃ・・・い？」

「どうかしましたか、ハヤトさん？」

「いや、結構来てるね。あ、玄関で立ち話つてもなんだし、どうぞあがつて」

「おじゃまします」

恐怖！怒りのオーラ（後書き）

因みにハヤトが歌っていた曲はW a Tの「5センチ」です

見解？

「ところで、挨拶周りであった事のない人が3人いるんだけど」

「では私から自己紹介しますわ。わたくしは白金ルナ。学校で委員長をやっておりますの」

「白金・・・ああ、マンションに住んでる白金さんか」

「あら、御存知でしたの」

「君の家を伺った時、御両親がいらしてね」

「そうでしたか」

「僕は双葉ツカサです。宜しく」

「うん、よろしくねツカサ君」

「最後はオレか。オレはジャックだ」

「へえ、珍しい名前だね。外国出身？」

「まあ、そんなところだ」

「さて、ストレートに本題に入った方が良いでしょう？それで話題は何かな？」

それから約10分、ハヤトは各々の主張を聞いていた。この時点でツカサとジャックは蚊帳の外。ツカサは面白そうに笑っていたが、ジャックは退屈そうにしていた。

「ええ、各自色々言った所でポイントをあげてみるとしよう。  
まず1つ目。何故ミソラちゃんがスバル君の家で生活する事にな  
ったか納得がいかない。」

2つ目。ミソラちゃんとスバル君が恋人関係になっている事が納  
得できない。一応、こんな所でいいかな？」

「ええ、そんなところですよ」

ルナをはじめとする一同が頷いた。

「じゃあ、僕の見解を言わせてもらうね。まず1つ目の件に関して  
は、ミソラちゃんは理由を最初においても良かったよね。そうして  
おけばこの件に関しては揉め事は起きなかった。それはいいかな？」

「・・・はい」

「ただ、別の見解も出来る訳だね。ミソラちゃんがスバル君の為に  
あえて話さなかったという風にも考えられる」

「それはどうして？」

「色々考えられるけどこの場で言えるのはゴン太君とキザマロ君は  
どんな理由であれ納得しそうになかった」

「どうしてそんな事が言えるんだよ!!」

「今のもそうだけどさつき1つ目の件の話をしている時、二人は声  
が荒くなっていた。こんな状態だったら何を言っても無駄だったとい  
う事さ」

「何だと!!」

「やめなさい、ゴン太」

「グッ!!」

「とりあえずこれが僕の1つ目の見解。じゃあ2つ目ね」

見解？（後書き）

何かほとんど会話ですね汗  
もうちよつと文章力上げないと・・・

## 見解？（前書き）

最初に言っておきます。

今回も会話量が多いですハイ。

## 見解？

「2つ目の件。これ正直、僕が介入してまで話し合う事でもないと思うんだけど・・・じゃあさ、納得できないのはどうして？」

「だってミソラちゃんはアイドルなんですよ」

「だからか・・・」

「えっ!？」キザマ口は余りに意外な反応に驚いた。

「君達のミソラちゃんの第一印象ってアイドルなの？道理で・・・」

「何ですか！それが悪いっていうんですか？」

「悪いとは言わないよ。ただスバル君の場合、そうは思っていない」

「そ、そうなんですか、スバル君？」

「それは・・・その・・・」

「本人は無自覚かもしれないけど自然とそうしていたって事。スバル君はミソラちゃんを一人の女の子として見ている。じゃあどうしてそう出来たのか？それは多分、それぞれの過去にあるんじゃないかな」

「過去ってどういう事ですか？」

「スバル君には誰にも打ち明けられない悩みがあった。同様にミソラちゃんにも悩みがあった。そして偶然・・・多分展望台で出会った。あそこは1人きりになりたい時には絶好の場所だからね。恐らくその時スバル君はミソラちゃんの事を知らなかった。だからアイドルとしてではなく、1人の女の子として接する事が出来た。そして似た境遇を持つ二人はお互いの悩みを打ち明けた。ただ、その時ブラザーバンドを結ぶまでには至らなかつたんだろうね。その後、何かしらの出来事があって二人はお互いを諭した。自分を前向きにしてくれたスバル君に感謝してミソラちゃんはブラザーを結んだ。ミソラちゃんは本当にやりたい事を見つける為に1時期歌手を引退することにした。こんなこんな感じじゃないかな？」

「どうしてそこまで分かるんですか？」

ミソラはハヤトの余りに正確な推測に驚いた。無論それはスバルも一緒だった。

「ただ何となくそんな所ではないだろうかという推測さ・・・」

「それでも!」ルナが叫んだ。

「それでも納得ができないわ・・・」

「どうしてだか分かるかい?その気持ちがどこから来るのか。僕には分かる。まあ、それを一々言っただけあげる程、僕も親切ではないのでね」

「さつきから言いたい放題言いやがって。もう我慢できねえ・・・」  
ゴン太は拳を震わせていた。

「この状況・・・もしかして何言っても無駄かな?」

「うるせえ!電波変換でぶっ倒してやる!!!」

これには皆驚いた。幾らなんでも生身の人間に電波上になった人間と勝負なんてしたら結果は火を見るより明らかだ。ところが、

「いいよ」

と予想外の答えが返ってきた。

「それで納得がいくなら僕は勝負の申し出を受け入れよう」

「!!!」

ゴン太は度肝を抜かれた様になったがプライドがリタイアを許さなかつた。

「よおおおおおおおし。やってやろうじゃねえかあああああああ  
あ!!!」

「ちよつとハヤトさん。電波変換もしないで闘うなんて無茶ですよ  
ハヤトは呑気そうに

「心配無用。僕自身は闘わない。闘うのはエレメントさ」

『エ、こんな事で闘うんですか?何だか面倒くさいです・・・』

「まあ、そう言っただけ」

『はあ、仕方ないですね』

## エレメントVSオックス・ファイア

外に出てゴン太は電波変換した。

「さて、始めますか」

ハヤトはいつ用意したのか、少し変わった形の眼鏡を持っていた。よく見るとそれは、レンズの色が水色になっているビジライザーだった。

「あれ、それってビジライザーですか？」

「え、ああコレ？これはただの電波眼鏡だけど・・・ビジライザーか。悪くない名だね」といかにも楽しそうにしている。勝利を確信しているのだろうか。

「ウエーブバトル・ライド・オン！！」

・・・とはいったものの、エレメントは相変わらずやる気0。

「そっちが来ないならコッチからいくぜ。オックス・タックル！！」  
オックス・ファイアが勢い良く突っ込んで来た。普通のウイザードがまともに受けたらひとたまりもない。

が、

『ハア、何処狙っているんでしょうね』とあくまでやる気0。  
で、何処にいるのかというとオックス・ファイアの背後にいた。

「アンガーパンチ！！」

素早く振り返りエレメントがいたウエーブロードを叩きつけた。  
が、既にそこにはおらず、全く別の場所にいた。

『単細胞』

ただでさえ、冷静さを失っているゴン太に追い打ちをかけるように挑発。

『オイ、ゴン太。少しは落ち着け』

「うるせえ！！」

いまやオックスの方が冷静な判断が出来るほどだった。

そんな事が何十回も繰り返され、元々未だに完全に電波変換している状態に慣れきれていないゴン太はさすがにバテてきていた。

「はあ、はあ、はあ……」

「なんだ、もう終わりですか」

「エレメント、お前も退屈だろ。1回でキメちゃいな」

「リョーカイ」

そう言うとエレメントの周りに風が吹き始めた。しだいにそれが渦を巻き、エレメントのもとに集まってくる。

「サイクロン・スラッシュ!!!」

渦の中から無数の風の刃が現れ、次々とオックス・ファイアを襲った。そのあまりの速さにかわす事も出来ず、収まった時には装甲の所々に亀裂が入って電波変換が解除された。

誰がこんな結果を予測できただろうか。電波体が普通のウィザードと戦って負ける等という結果に。

## エレメントVSオックス・ファイア（後書き）

エレメント、チートでしたね。

最近こんな方向で良いのかなと偶に思ったりします。

ユーザー以外の方でも意見、感想が書けますので遠慮なく書いていただけると幸いです。

## 迷い

電波変換が解除されてしまったオックス・ファイア。が、元々ゴン太が丈夫だったお陰で彼自身に目立った外傷は見られず、ダメージの殆どはオックスが受けていた。とはいえ、デリートに至るものではなく、修復プログラムで治せるほどのものだった。

『相手になりませんね』

「言つなそれ以上。っと何か中途半端に終わっちゃったけれども今日はもう遅いからみんな帰った方がいいよ」

そう言つてハヤトが自分の家に入ろうとすると、

「待つて」とミソラの声がした。

「何？まだ何かあつた？」

「いや、その……ヤッパリ今日はいいです」

「……そう。じゃあね」

「私達も帰ろう、スバル君」

「う、うん」

結局どういふ事になったのだろうか。先程の台詞から察するにスバルとミソラの仲はとりあえず認められたととつてもいいかもしれない。

しかしそれを何があつても認めない、いや認めたくない人物がいた。言うまでもなくルナである。自宅に帰り、自室に入ってからずっとポーッとしていた。

『ルナちゃん、ルナちゃん』

「はっ！！な、何かしら、モード」

『家に帰ってからずっとポーッとしてますけど、どうかしたんですか』

「モード、私、今すぐくモヤモヤしてるの。このキモチは一体何？  
『きつと恋心なんじゃないですか』」

「恋心？」そんな所へ

ピンポン！とインターホンが鳴った。両親は仕事で中々いない。かと言って来訪者を待たせる訳にもいかない。仕方なく玄関を開けると、黒装束の恰好をして顔の口から上を隠している女性が立っていた。

「白金ルナさんですね」

「そうですね、どなたですか？」

「訳あって今は名乗ることはできません。が、そんな事は重要ではない。違いますか？」

「どうということ・・・」

「何も心配は要りませんよ。私はただあなたの力になりたい。そう思っているだけです」

そう言うのと黒装束の女は紫色のカードを差し出して言った。

「これを使いなさい」

「なにこれ・・・こんな変なモノ受け取る訳にはいかないわ!!」

「そう大声を出さずに。あなたの愛しの人に想いを伝えるためです」

「!!どうしてそれを・・・」

「私にはすべてお見通しです」

「それでもできない・・・」

「あなたの想っている人が更に遠くなりますよ？」

「(ドツクン!!)」

「まあ、使うかどうかはお任せします。それでは・・・」  
そう言って去っていった。

「始まる・・・あのお方の理想とする闇の世界の新たな1ページが。  
ホッホッホッホ・・・」

鈍感って…

さてさて再び寝坊したスバル。ミソラが起こしたからいいものの、そうしなかつたら遅刻は確実だった。

「もうっ、少しは自分で起きる努力をしてよね！」

「ゴ、ゴメン」

そんな事を言いながら家を出るとハヤトが立っていた。

「あれ、ハヤトさん。どうしたんですか？」

「昨日君達の友達に少し言い過ぎた気がしてね。謝ろうと思ったんだ」

ミソラにとってはこの時間が今までずっと引つ掛かっていた疑問を明らかにするのに好都合……のハズだった。

「あの、ハヤトさん」

「ん、何？」

「星河く〜ん、ミソラちゃ〜ん」

いつもの3人+ツカサ、ジャックが来た。

「あれ、ハヤトさん」 ツカサ

「やあ。今日は昨日のお詫びをしにきた。まずはゴン太君。昨日は少しやり過ぎたかもしれない。ごめんね」

「ああ、昨日の事か。もう全然気にしてねえぜ。牛丼3杯食べたらどうでもよくなつちまった」

「（オイオイ、流石に単純すぎるだろ。エレメントが単細胞と言うのも分かる気がする……）そう、それならいいんだけどね。次に白金さん。きつい事を言ってしまったって辛くなかったかい？」

「別に……あんなの大して気にしてませんわ」

それを聞いた途端ハヤトは顔つきを変えて言った。

「じゃあ、1つだけ警告しておくよ……道を誤ってはいけない」

「ハア？なんのことですの」

「僕の思い過ごしならいいけど、昨日何か貰ったりしてない？」

「（まさか昨日のコト・・・）いいえ、なにも」

「そう・・・」

そのまま立ち去った。

「全く、何なのあの人・・・行くわよ！！！！」

それからというもの、ルナは常時不機嫌だった。

「スバルの部屋にて」

「最近の委員長、なんかずっと機嫌が悪そうだけどどうしたのかな？」

「えっスバルもしかしてルナちゃんの機嫌が悪い理由知らないの？」

「うーん、よく分からないよ」

「（スバルってホント鈍感なんだな）。まあそこがすばるらしくもあるんだけど・・・）」

翌日、翌々日とミソラとスバルが距離を縮めているように見えて、ルナは焦りを感じていた。

そんな時、ふと紫のカードの事を思い出した。

「（もしこれを使ったら大変な事になるかもしれない。でも・・・スバル君に想いを伝えるだけなら・・・）」

そして・・・

## 暴走

今日は土曜日。学校は休みである。

スバルは先程本を読み始めてしまい、他のものは既に視界に入っていない。一方ミソラはギターを弾いた。いつもの黄色いものとは違うサブのものではあるが少しでも早くスバルに気付いてほしかったが、気付く気配すら見せない為、とうとう不機嫌になって荒い足取りで下へ行ってしまった。

さてスバルも読書に飽きて外に出てみた。

そんなこんなでお昼の時間になった。何故かミソラはニヤニヤしていた。

席に着くとスバルはその訳を理解したと同時に溜息をついた。

人參たつぷりのカレー。茜も人參は入れるが量が比べ物にならない。

「さあめしあがれ」

「（ハメられた！！）」

「残しちゃだめだよ」

「分かつてるよ・・・」

スバルは人參が大の苦手である。ミソラは茜からそれを聞いてわざとそうしたのである。茜はその光景を見て腹を抱えて笑っていた。

それでもやつと、なんとか全て食べ終わったスバルは何も言わずに展望台へ行った。

ミソラもチョットやり過ぎたかな、と思って展望台へ向かった。そこでスバルは鉄柵に腕を乗っけて何やらブツブツ呟いていた。

「スバル、もしかして怒らせちゃったかな？」

「うん、ちよつとあの人參の多さにはビックリしたかな」

「ゴメンネ」

「ミソラちゃんは悪くないよ。ただ・・・僕はやっぱり星の事にな

るとつい夢中になっちゃうんだよ」

「私もそれは分かっているつもりなんだけど……」

「じゃあこれを僕達の目標にしようよ。僕は何かに夢中になって話を聞かない癖をなくす。ミソラちゃんはずぐ不機嫌になる癖を直す」

「うん分かった。私も努力するよ。その代りスバルもね」

「うん。頑張るよ」

展望台で二人きり。そこにこの光景を1番見てはいけない人物がいた。そう、ルナである。

「どうして……どうしてスバル君は私に振り向いてくれないの……!!」

その時、あの黒装束の女の言葉がルナの脳裏を過った。

(あなたの想っている人が更に遠くなりますよ……)

ルナは正常な判断が出来なくなった。そしてとうとう紫のカードをハンターにインストールしてしまった。

「Darkness」と発声が出た。

『!!スバル、後ろに何かいる!』

振り向いた時は既に遅く、ルナはオヒュカス・クイーンと化していた。

『スバル』

「うん」

『ミソラ』

「ええ、行くわよ」

「トランスコード、シューティングスター・ロックマン!!」

「トランスコード、ハープ・ノート!!」

「オヒュカス・クイーンってことは……」

『ああ、間違いねえ。アイツからあの女の波長を感じる』

『二人とも、くるわよ』

「スネーク・レギオン!!」オヒュカスの周りから蛇が現れて二人に襲いかかった。ロックマンはバスターで蛇を破壊していくが、一部が倒しきれず迫ってきた。

「ウワアッ!!」

「シヨック・ノート!!」

ハープ・ノートが残りの蛇を撃破した。

「助かったよハープ・ノート」

そう言ったのもつかの間、

「クイック・サーペント!!」

オヒュカス・クイーンが二人を引き離し、体を使ってハープ・ノートをきつく締めあげた。

「うっ……くっ……」

「やめる!!」

『ダメだ、このまま突っ込んででも奴の締め付けは簡単には外せねえ』

「じゃあ、どうすれば……」

「くっ……委員長、どうしてこんなことを……」

「あなたのせいよ」

「僕の……?」

「あなたが……あなたが私の気持ちに気付いてくれないから……」

「……」

締めつけがどんどんきつくなっていく。

「……今の君は委員長じゃない……」

「なんですって!!」

「君が僕の事をどうおもっているのかは分からない。でも、それがどんなものだったとしても、こんなことをしているキミの気持ちを受け取るつもりはない!!!!!!!!」

(フッフッフ……そうか。ならばキサマも消す!!)

(えっ、チョッ……待ちなさい。私は……私はただスバル君に……)

(あなたの意思など最初から聞くつもりなどありませんが……)

(あなた誰?)

(私はあなたですよ。いや、正確に言うならばあなたの嫉妬と憎しみの感情が増幅して具現化したもの……もうあなたは私を止める事は出来ない……)

(そんな……)

ルナの抵抗も虚しく、オヒュカスは紫の渦にのみ込まれた。それがなくなると、体には目立った変化がないものの、全体的に黒くなっていた。

「フン!!」

手始めのつもりなのかハーブ・ノートを地面に叩きつけた。その衝撃でミソラは電波変換が解けてしまった。

「ミソラちゃん!!クソッ!!」

『落ち着けスバル』

「こんな時に落ち着いてなんて!!」

『こんな時だからこそ落ち着くんだ。昨日のオックスとエレメントの戦いを思い出せ。冷静さを失ったからアイツに負けたんだ』

「ノンビリオシャベリシテイルヨウガアルノカ」

黒いオヒュカス(ダーク・オヒュカス)はクイック・サーペントで連続突進攻撃を繰り返してきた。

「くっ、速い。ロック、ノイズPGMは使える?」

『ダメだ。まだノイズが足りねえ。クッ!』

「フッ。ソロソロオワリトスルカ。ゴルゴンアイ!!」

「クッ(ここで終わりか……)」

その時、ハンターに

「データ転送、トライブオン、ファイアダイナソー」と表示された。

バシユツ！！ゴオ~~~~！！！！

その場にいた誰もが何が起きたのか分からなかった。ロツクマンを中心として火柱が上がっている。

「ナンダ、ナニガオコツテイルンダ!？」

暫くすると火柱が消え、ロツクマンはファイアダйнаソーの姿をしていた。

「ロツク、これって・・・」

『信じられねえ。オーパーツの力だ』

「でも、どうして・・・」

『考えるのは後だ。とりあえずアイツを倒すぞ』

「うん」

「イクラスガタガカワロウト・・・クイック・サーペント!!」

「ダイナキャノン!」

ダーク・オヒユカスはそれをもろに食らって怯んだ。

『スバル、今だ!』

「よし、KFB（絆フォースピックバン）、ジェノサイドブレイザ

ー!!!!!!」

「グワ~~~~~~~~!!!!」

ダーク・オヒユカスは消滅し、ルナは元の姿に戻って気絶していた。

## 暴走（後書き）

戦闘シーンって書くの難しいですね汗。

幾つもの作品でこういう言葉を見てきましたが  
実際に自分でやってみるとそれが分かります。

## ルナのキモチ

スバルは電波変換を解除し、まずミソラの様子を見に行った。

「ミソラちゃん、大丈夫？」

「スバル・・・うん、私は大丈夫だよ。それよりもルナちゃんは・・・」

ルナは気絶したままだった。

「委員長！委員長！」

「ルナちゃん、ルナちゃん！しっかりして！」

「う、ううん。え、星河君！？ミソラちゃん！？」

「大丈夫ルナちゃん？」

「ミソラちゃん・・・私・・・ごめんなさい・・・」

「委員長は悪くないよ・・・」

「いいえ、今回の件は私が悪かったわ」

「どうしてこんな事を？」

真面目に未だに分かっていないスバル。鈍感もここまでくれば重症だろう。

「だって・・・私だって星河君の事が好きだったんだもん！！・・・でもあなたは全く気付いてくれなかった。毎日毎日ミソラちゃんと一緒にいるところを見てるとあなたを一人占めされた様な気がしてならなかったのよ」

「まあ気持ちは分かるけどさ。でもこんなカタチになったのは許せないな」

「でもどうしてあの姿に？」

ルナは昨夜の事を話した。

「そのカードって今何処に・・・」

「確か・・・」ルナは展望台の足元を探し始めた。

「あっ、これだわ」

そこには真つ二つに割れている紫のカードがあった。

ルナが拾おうとするとカードから静電気が発生し、紫がかった黒い物質が現れた。

「ロツク、これってもしかしてクリムゾン？」

『いや違う。微妙にノイズが感じられるが、コイツからはどす黒いものを感じる』

言い終わらない内にその物質は吸い寄せられるように何処かへ行ってしまった。

「……とにかく二人とも、本当にごめんなさい！」

「も、もういいよ」

「そうだよ。謝ったんだからもういいよ」

「あたし、星河君を諦めるわ。そのかわり……スバル君!!」

「は、はい？」

「絶対にミソラちゃんを守り抜きなさい」

「うん、分かった」

「よかった。やっとルナちゃんも認めてくれたよ」

そこへスバルのハンターに電話が入った。

「はい、もしもし」

「スバル君。宇田海がまた例のものでやらかしてしまって……すまないが来てくれないかい？」

「ハイ分かりました。すぐ行きます」

「私も行くよ」

「チョット待って」とルナが引き止めた。

「コレを持って行って。何か分かるかもしれないからルナが差し出したのは先程の紫のカードだった。」

「うん、分かった」

「行こう、スバル」

『よっしやゝ血が騒ぐぜえゝ』

『アンタは相変わらねえ』  
『うるせえ』

「トランスコード！シューティングスター・ロッキーマン！」  
「トランスコード！ハーブ・ノート！」

## 謎の電波体

アマケンに着いた二人。だがウイルスがいる気配はない。二人は一  
旦電波化を解除した。

「天地さん」

「ああ、スバル君、ミソラ君。申し訳ないね。ウイルスはさっきデ  
リートされたんだ」

『ハア！？呼び出しておいてそれかよ』

「ロツク、天地さんに失礼だよ」

「いや、ウォーロツクの言う通りこちらから呼んでおいて申し訳な  
い。ただし気になる事がある」

「気になる事？」

「ウイルスをデリートしたのは白い電波体だったんだが、私はその  
姿を見た事がないんだ」

「白い電波体・・・もしかしてツカサ君か暁さんじゃ・・・」

「いや、外見が全く違った。しかもソイツは妙な事をしていったんだ  
「妙な事って何ですか？」

「そいつは僕がスバル君と電話をした直後に現れたんだが、あつと  
いう間にウイルスを全てデリートしたのかと思いきやメットリオを  
一体さらっていったんだ」

『ケツ、変わった趣味を持つやつもいるんだな』

「さて、ホントに悪いね。何か奢ろうか」

「じゃあ、ちよつと調べてほしい物があるんですが」

「調べてほしい物？一体それは何だい？」

「ウォーロツクと・・・えつとコレです」

スバルはポケットに突っこんでいたカードの残骸を天地に差し出し  
た。

「ん、何だいこれは？私は見た事がないが・・・」

スバルは天地にアマケンに来る前に起こった出来事を話した。  
「なるほど、そういうことか。よし、じゃあまずウォーロックを診  
てみようか」

その頃、コダマタウン某所

「メットリオがこれでやつと20匹か」

『本気で考えているんですか。こんな事・・・』

「そうでなきゃこんな事している訳無いだろ」

『くれぐれも危なっかしい事だけはしないで下さいよ・・・』

・ハヤト・・・』

## 増え続ける謎

ウォーロックを専用の機械に入れ、天地はパネルを操作してウォーロックの状態を診た。

・・・約5分後、

「スバル君。こんな言い方はアレだが本当にオーパーツの力が出現したのかい？今の所ウォーロックには

その形跡は見られないんだが・・・」

「そんな・・・確かにダイナソーの力が宿ったんです」

『そうだぜ。俺達が追い詰められた時、いきなり火柱が上がったんだ』

「私も見ました」

「うゝむ、だが今の所その形跡はない。ひよっとすると・・・」

「もしかしてWAXAがプログラムを作ったとか・・・」

「いや、今の所そんな情報は無いし、それだったら一旦スバル君を呼んで試しているだろうからね。こ

の状況からするとWAXAではない誰かがカードデータとして送ってきた可能性も考えなくてはならな

いが、それでも困難な筈だ。君達も覚えているだろう？ドクター・

オリヒメがオーパーツを使ってムー

大陸を海の底から引き揚げたのを。つまり大陸1つまるごと浮かばせるほどの電波をカード化させると

なると技術的にものすごく困難になるんだ。まあここまで言っても全否定はできないんだけどね」

「そうなんですか。ロック、今体の調子はどうなの？」

『今の所、こつれとって異常はねえな』

「よし、もう戻っていいぞウォーロック」

『おっ』

ウォーロックはスバルのハンターに戻った。

「じゃあ天地さん。次はこれを調べてくれますか？」

スバルは先程の紫のカードを差し出した。

「ああ分かった。多分今日1日じゃ終わらないだろうから、何か分かったら連絡するよ」

「宜しくお願いします」

そしてミソラとアマケンをあとにした。

とはいえ、これから行く予定のある場所など無いのでスバルは途方

に暮れていた。

「これからどうしようか？」

「うん、あ、じゃあオクダマスタジオに行かない？」

オクダマスタジオとは一言で言えば現在のミソラの仕事場だ。以前、  
ディラー絡みの事件等で何度か

行った事のある場所だった。

「うん、いいよ」

「やった。じゃあ早速しゅっぱつ」

丁度いいタイミングでウェーブライナーが到着したので二人はそれ  
に乗った。

## 久し振りの再開

乗り込んで約20分。ウェーブライナーはオクダマスタジオ前に到着した。

車内でのスバルはミソラに右腕を絡められていたので周りの視線の痛いこと痛いこと。降りてからも暫く顔が赤かった。

「スバル〜さつきから顔が真っ赤だぞ〜？」

「そ、そんな事ないよノノノノノノ」

「あ、照れてるんだ力〜ワイ〜」とこんな感じで建物の入り口の所に来るまでからかわれたスバルであった。

「あつ！そういうえば僕入館証持ってきてないや・・・」

以前、初めてここを訪れた時、入館証を持っていないという理由で警備ウイザードから入館を拒否され、スバルが電波変換してわざわざミソラの楽屋へ受け取りに行ったくらいである。

「え〜スバル持ってきてないの？しょうがないな〜。ちょっと待ってて」といかにも楽しそうに自分の彼氏を平気でおいていつてしまった。

『お前、将来あの女の意志には逆らえなくなるだろうな』

「頼むからこれ以上からかわないで」

と、そこに現れたのは

「あれ、スバル君？」

振り返ると浦方マモロウがいた。持ち物から察するにステージの後片付けが終わった頃だろう。彼とはメテオGに乗り込む時のサポートをしてもらって以来だ。

「お久し振りです浦方さん」

「ホントだな。ところで今日はどうしたんだ？」

「はあ、まあ色々・・・」

スバルはここに来た訳を偽りを入れながら話した。所々でウォーロツクがツッコミを入れてきたので気が気でならなかった。

そこへミソラが戻ってきた。隣には同期のスズカがいた。

「スバルお待たせ。あつ、浦方さん。お久し振りです」

「おう、久し振りだな」

「スバル君久し振りだね」

「うん久し振りだねスズカちゃん」

「ねえスバル君。ミソラから聞いたんだけど告白したってホント？」

「へっ!？」

久し振りに最初に聞かれる質問がそれとは・・・まあ予想が出来ない事ではなかったが実際聞かれるとかなり動揺するものだった。

「う、うん。したよ／＼／＼／＼／＼」

「へ、したんだ。で、ミソラは？」

「うん、私もしたよ。だから私達、恋人同士なの」

そう言ったかと思いきや今度は左腕に抱きついた。

ただでさえ赤かったスバルの顔が更に赤くなった。

「アハハハ。ミソラ、スバル君顔真っ赤だよ」

「おお、おお、おあついなお二人さん。とはいえミソラ、彼氏をからかうのは程々にしておけよ。あ、いっけね、じゃっ、俺は仕事があるからそろそろ失礼するぜ」

先程の出来事からスバルは固まってしまつて動かない。

「スバル!スバル!」

「スバル君!スバル君!」二人で体を揺さぶつてみたが正気に戻りそうではない。

『チツ、一々メンドクせえ奴だぜ』ウォーロツクが仕方なさそうにウィザード・オンした。

「ロツク君!」

『オイ、二人でスバルの肩持つてる。オレがスバルを起こす』

「ちよつと乱暴な事はやめてよ」

『そんな事しねえよ』

そう言うとスバルの耳元で何か囁いた。次の瞬間、スバルは電気ショックでも受けた様に目を覚ました。スバルの反応を見るとウォーロックは素早くハンターに戻った。

そこにハーブが入ってきた。

『ゲツ、ハーブ!!』

『ハア、アナタもう少しマシンな反応は出来ないのかしら? まあいいわ。ところでさつきスバル君になんて言ったの?』

『ああ、それはな(.....).....って言ってやった』

『ポロロン。それならスバル君もすぐ起きるわね』

さて、正気に戻ったスバル。すぐさまミソラの方を向いた。

「ミ、ミソラちゃん。どうしたの?」

「えっ?」

「どうして泣いてたの?」

「私泣いてなんていないけど.....」

「だってさつき「ミソラが泣いてるぞ」って誰かが言ってた気が.....」

ミソラはなあんだ、と安堵の表情を浮かべた。

「多分それはロック君が言ったんだよ」

「まさか.....本当なのウォーロック?」

『ああオレさ。オレもここまで効果抜群とは思ってなかったけどな』

「なんでそんなことを.....」

若干呆れ顔で言った。

『いやあ、ただ何となくさ。しかしこりゃあ大発見をしたぜ。これから毎日そう言って起こしてやる』

「ロックそれだけはヤメテ!!」

『イヤなら自分で起きるようにするんだな』

そう言ったときりハンターから出てこなかった。ハンターを揺さぶっても出てくる気配は一向に無かった。そんな光景を見てミソラとスズカは腹を抱えて必死に笑いを堪えていた。

数分後にやっと観念したかと思っただらでできたのはハーブで若干顔が青ざめていた。

「ちょっとハーブどうしたの青い顔して」

『ハア、ハア。ハンターの中で思い切り揺す振られたからちょっと気持ち悪くなつたわ。こんな思いしたのはウィザードになる時に大量のデータを入れられた時以来かしら・・・』

「つてことはミソラちゃんも？」

「うん。多分大丈夫だろうと思っただけハンターの中に入れてままにしておいたらハーブ本当に苦しがつていたもんね？」

『まあね』

「ところでなんでハーブが僕のハンターの中にいたの？」

ハーブは簡単に事情を説明した。

『.....つて訳ね。それにしても良かったわねミソラ』

「えっ、な、何の事ハーブ？」

当然と言えば当然だが突然話の矛先を向けられたのでこんな反応しか出来なかった。

『もおゝトボケちゃって。愛しのスバル君がそこまでミソラの事を思ってくれてた事よ』

「い、愛しのつて／＼／＼／＼／＼」

ミソラはちよっぴり頬をピンクに染めた。

「二人とも相性ピッタリだね。チョット羨ましいなあ」とスズカ。と言つてもルナの様に嫉妬の意味ではなく、二人の仲をそのように評価したのである。

『スズカ、私達も負けていられないわよ』　アイス

「うん、そうだね。あ、もうこんな時間。じゃあミソラ、スバル君。

私もこれから仕事入っているからまたね〜」と笑顔で特設ステージの方へ走っていった。

「学校がお休みなのに仕事があるなんて大変だね〜」

「うん、まあね。それに私も明後日から仕事が入ってくるから学校に行ける日が不規則になってくるし、スバルとも中々一緒にいられなくなるんだよね・・・」

と一瞬暗そうな表情を見せた。が、

「でも明日はスバルとデートだし、一緒に生活するようになって初めて一緒に寝た時にスバルが言ってくれた言葉を守ってくれるって私は信じてるよ」といつもの明るい表情に戻った。

「行こうスバル」

「行くって・・・何処に？」

「私の楽屋。初めてブラザーを結んだ後から一生懸命考えて作ったスバルのためだけの歌を聞かせてあげる」

何と自分の為に曲を作ってくれていたのだという。以前、TKタワーで自分の存在を宝物とまで言ってくれた時の嬉しさも並大抵ではなかったが、今はそれ以上だ。

「僕のための曲？楽しみだなあ。是非聴かせてよ」

「うん、じゃ、行き」

「ミソラの楽屋にて」

「改めてみると結構広いなだね」

「一見してみるとそうかもかもしれないけど、泊まり込みの時とかに荷物とかを入れるとあつという間に一杯になっちゃうよ」

「へえ、そんなものなんだ」

ミソラは楽屋にあった黄色いギターをケースから出してチューニングを始めた。

「それを見るのも久し振りだね」

「ホントだね。じゃあいきま〜す」

静かなギターにミソラの声が見事にマッチしていた。ちなみに曲のイメージは歌うことへの意味を見失ったミソラ自身に手を差し伸べてくれたスバルに対する感謝の気持ち……といった所だ。

「ふう、どうだった？」

「うん……よか……っ……たよ……ありが……とう……」  
ドサツ。言い終わるなるなり疲れが溜まっていたのかベットで眠ってしまった。

「あっ、スバルったら〜」

そう言いつつも駆け寄ってみると何とも幸せそうな寝顔だった。

「フフツ。やっぱりスバルの寝顔は可愛いなあ」

そして……

呼び捨ては大切？（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません

## 呼び捨ては大切？

スバルがベッドに倒れてから約20分が経過しようとしているが当の本人は起きる気配すら見せない。が、今のミソラには大したことではなかった。スバルの安らかな寝息を立てている寝顔を見ながらそつと頭を撫でていた。もうお分かりだろう。そう、膝枕をしている状態なのである。ウォーロックは先程の方法でスバルを起こそうとしたが、ハーブが見兼ねて何処かへ拉致っていった。現在のミソラにはスバルしか眼中にない。だから相棒ハーブの言い合い等聞こえていない。

「フフツ、やっぱりスバルの寝顔って可愛いなあ。よし、エイ！」突然ミソラはスバルの寝顔に顔を近づけた。とはいえ唇は密着させず、少し隙間を開けて空気が入る様にしてあるため、息が苦しくなつて目を覚ますなんてことはない。

そんな状態がかれこれ30秒。さすがのスバルも口に異様な感触を感じてゆっくりと目を開けてみると目を閉じている度アップのミソラが視界に大きく入ってきた。まあ当然恥ずかしくてすぐさまこの状況を何とかしたいのだが、ミソラがまたまた抱きついているので無理矢理離れようとするのもどうかと思った。かといってずっとこのままにいるわけにもいかない。ミソラに気付かれない様にどうすればいいのかと考えていると、

「スバル、私を誤魔化そうだったってそうはいかないよ」とミソラの方から離れた。

「ミソラちゃんノノまさか気付いていたの？」

「うん。スバルが起きた事もね」

全て見透かされていた事にどうしようもない様な感情を抱いたスバル。

(フフ。スバルって私には本当に正直なんだね。チヨットからかってみようかな?・・・)

「ねえスバル」

「な、何?」

「どうして私の事呼び捨てで呼んでくれないの?」

余りに予想外の質問にスバルは回答に困った。

「そ、それは・・・」

「恥ずかしい事なんてないんだよ。私達恋人同士で同じ家で生活しているのにどうして呼び捨てにしてくれないの?」

(アレ、何なのこのキモチ……。チヨットスバルをからかってみようって思っただけなのに・・・何だかとっても悲しい・・・) 既にミソラは冗談抜きの涙目になっていた。

まあ、恥ずかしいのも理由の一つだろう。確かにミソラと同居することになった日の夕食の時にそんな話をした覚えもある。それ以降、ミソラは会話をする時は学校にいる時を除いて必ず呼び捨てにしていたが自分はどうか。恐らく数えるほどしかないだろう。更に言えば自分はミソラを家族として見ているのだろうか。ハヤトが仲介に入ってくれた時、自分は彼女を一人の女の子として見ている、と言った。その事に偽りは無い。現に初めて会った時に自分はミソラの傍で味方でありたいと思った。それより以前に彼女の事を知っていれば、絶対にそんな事は出来なかった筈だ。

そんなこんなで答えが出せずにいるとミソラは痺れを切らしたのか

「・・・もついいよ」

「えっ!?!」

「もついいよ!!!」そう言って一人でスタジオを出て行ってしまった。

『どうすんだよスバル』いつの間にかウォーロックが戻ってきていた。

「多分家に戻っていると思う。今ならまだ間に合う」

折角気付きあげたミソラとの関係をここで崩す事だけはどうしても避けたかった。何を思ったのかスバルはミソラのギターをケースにしまつて背中に担いでウェーブライナーに乗り込んだ。

『オイ、スバル。勝手にそんなことしていいのか？』

「僕にも分からない。でも、今僕がやれそうな事をやる。それだけだよ」

『（変わったもんだな、お前も・・・）そうか。ならオレは何も言わねえ』

ウェーブライナーがコダマタウンに着くとハヤトが髪を風にたなびかせて立っていた。

「どうしたんですかハヤトさん？」

「・・・話がある。ちょっと付き合ってくれ」

そう言つと展望台の方へ歩き出した。

覚悟（前書き）

大変遅くなりました

申し訳ありませんm（ - （ - m

絵文字難しい・・・

## 覚悟

展望台に着くとハヤトは振り向いて鉄柵に寄りかかった。

「何があったのかは分かっている。ミソラちゃん（彼女）なら泣いて家に飛び込んで行ったよ」

「やっぱり……」

「この前一緒にいた時は結構いい感じに見えたけどねえ。もし亀裂が入ってしまうとしたら……」

顎を右手でLの字で挟んで考えていた。

「スバル君が彼女を呼び捨てにしてない、そういうことじゃないかな？」

「どうして分かるんですか？」

「夕食を頂いた時の会話を思い出したんだよ。あの時以来、殆どそうしてないんじゃないのかい？」

「……そうです」

ズバリ核心だった。しかし此処まで寸分のブレもなく突かれると相当応えるものがある。

「暗く事はないよ。謝りに行くんでしょう？これから」

「はい」

「止めはしない。彼女もそれを待っているだろうからね。ただスバル君、キミも彼女に言うべき事は言

うべきだと思うよ」

「えっ？」

「君の事だから彼女を悲しませたくないから要望は全部飲むようにしていそうに見えるけど、言うべき

事はキチンと言わなきゃいけない。無理なモノは無理、嫌な事は嫌だって」

「それは・・・」

「無論簡単ではないだろう。でもそればかりは克服しなきゃいけない。しかも誰にも頼らず君自身が」

「・・・」

「とりあえず言うておくべき事はそれだけかな。まあ、いい結果になることを期待しているよ」

そのまま風のようにハヤトは行ってしまった。

覚悟（後書き）

やばい意味分かんない

しかも九分九厘会話

ヤバイヤバイヤバイどうすりゃいいんだよモー

深まる信頼（前書き）

ごめんなさい！

かなり間が空いた割には全然大した事ありません。

それでも読んでいただける方は幸いです。



「初めてミソラとブラザーを結んだ時、僕は新しい自分を目指そう  
って思った。そしてブラザーを切ってまでして僕を守ろうとした時  
僕もミソラの為に何かしたいって思った。でも、今の僕は何も出来  
ていないよね。世界を救う事は出来たけど君には何もしてあげられ  
てない」

「やめてスバル。そんなに自分を責めないで（焦）」

「でも今見つけた。この前の委員長の件で分かったんだ。ちゃんと  
守ってあげなきゃいけないものがある。ミソラ、覚えてる？ゴン太  
が委員長を守りたいっていう理由で遊撃隊を抜けようとした事。多  
分今の僕の心境はあの時のゴン太と一緒にだと思う。何としても守り  
抜きたいのがミソラ、君なんだ・・・」

「／／／／スバル・・・／／／／」

「／／／／ミソラ・・・／／／／」

二人は強く抱きあった。そして・・・キスをした。

「ありがとう、スバル」

「ど、どういたしまして／／／」

「じゃっ、もうこの話は終わりっ。明日はデートだよ。思いっきり  
楽しもう」

「っっ」

二人で手を繋いで二階へ上がった。  
それをドア越しに聞いていたのは・・・

「スバルも成長したわね。最初にミソラが泣きながら帰ってきた時はビックリしたけど、これなら話達が出る必要はないわよね・・・  
大吾さん？」

「ああ。俺がいなくてもここまで成長できたんだ。流石俺の息子だな」

さて、二階の二人。明日のデートで何処に行くか、何をするかを話し合っていた。そこへ・・・

くく

スバルのハンターに電話がかかってきた。

「はい、もしもし」

「もしもし、スバルちゃん？」

「ヨイリー博士ですか？」

「そうよ。今から少し時間を貰えるかしら。話したい事があるの」

## 深まる信頼（後書き）

はい、大した事ない上に中途半端な終わり方です。  
無論理由はありますけどね・・・

## 微妙な展開

「話というのは？」

「ええ。それは今から話すと遅くなっちゃうから、明日WAXAに来てくれないかしら。」

「あ、明日……」

スバルは迷った。ミソラとのデートを今更中止にさせるなんて事は秀团的にも無理だ。自分だって楽しみにしているのだから。そんな事を考えていると……

「あつ、ヨイリー博士。お久しぶりです。」

「あら、ミソラちゃんもいるの？丁度いいわね。ミソラちゃん、あなたも明日WAXAに来てくれるかしら。」

「はい！」

ここで言うのもアレだがスバルはさっきの十数秒はなんだっただろっと思った。

「ありがとう。あ、それからね、来る時に連れて来て欲しい人がいるのよ。」

「誰ですか？」

「名前は何だったかしら……忘れちゃったわ。ゴン太ちゃんをウ

イザードだけで倒しちゃったとかジャックちゃんが言ってたわ」

「（ハヤトさんの事だな・・・）分かりました。彼にも連絡してみます」

「宜しく願いますわ」

プツツと電話が切れた。

「あ、あのミソラ？そんなに簡単に返事して良かったの？」

「どうして？」

「だって明日はデートに行くんじゃないの？」

ミソラはなあんだ、とでも言いたげそうな顔をして言った。

「デートならWAXAに行った後で行けばいいでしょ」

「う、うん。そうだね（いいのかな？）」

やや疑問だったが色々考えるとまた面倒な事になりそうな気がするので止めておく事にした。

「じゃあハヤトさんに連絡して都合を聞かないと・・・」

（

は、い、もしもし」

画面の様子から察するに夕食の準備をしていた所だろう。

「あ、スバル君。どう、ミソラちゃんと仲直りできた？」

「はい、お陰様で。ありがとうございます」

「よしてよ、堅苦しい。で、何か用かい？」

「あゝ明日時間は開いていますか？」

「明日？午前中は開いているけど・・・」

「明日僕達と一緒にWAXAに来ていただけますか？」

「WAXAに？まあいいけど、どういった話だい？」

「僕達も詳しい事は聞いていないので何とも言えないのですが・・・」

「分かった。その時間は開けておくよ」

『ハヤト、味噌汁が沸騰してますよ』

「あゝ！！じゃあ明日ね」

慌てて電話が切られた。

その後夕食時・・・

「ねえ、二人とも。明日はデートに行くの？」

茜がからかい口調で聞いてきた。

「う、うん。その予定だけど・・・」

「ほう、スバルももうそこまでの域に達したか」

「／／／／／」

「／／／／／」

「大吾さん。二人とも顔が真っ赤ですよ」

「いやあちょっとからかい過ぎたか」

「あ、でもその前にWAXAに行かなきゃいけないんだけどね・・・」

「

「WAXAに？どういうことだ？」

スバルは先程のヨイリー博士との話をした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたの父さん？」

「実は彼に玄関ですれ違った時からずっと引つ掛かっていたんだが・

・俺は何処かで彼にあった気がするんだ。いや、どこかというよ

リNAXAで」

「えっ、それって父さんが宇宙に行く前って事？」

「そういう事になるな」

その頃ハヤト宅にて

「あゝあゝあゝ。味噌汁が熱くなりすぎちゃったな」

『火の元には注意ってハヤトの方が言っているじゃないですか』

「そんとおりだよ。まあ、食事は上手かったし結果オーライ。フゝ御馳走様」

両手を合わせた。

「さゝて明日は何か事情聴衆が入ったらしいし、午後からは久し振りにバイトだし大忙しだな」

『早目に寝た方がいいですよ』

「That's right.でもやっぱりこれは欠かせないな」

二階に駆け上がって演奏部屋に飛び込んだ。

「さゝて今日は何をやるのかな？」

キヨロキヨロと部屋を眺め回して目に入ったのは・・・

「よしっ、今夜はコレにするか」

それはシンセサイザーだった。

「まあ、自分の曲だからミソラちゃんは気付くと思うけど・・・」

またまた所変わって今度はスバルの部屋。

すると隣から聞き覚えのあるメロディが聞こえてきた。

「これってもしかして・・・」

もしかしても無かった。ミソラが歌い出したのだから。

「飛び交うシグナル それぞれの今日を乗せて

同じ周波数 重ね合い君と話す

迷い、躊躇いを振り切り

そこに ある筈の道を行こう

見上げる空は心に積もる願いの色

描く夢を映し出す 必ず

何時か この手に触れる明日への地図

強く 高く 届くまで 輝いて

そう、ミソラの「ハートウェーブ」だった。

「あゝ、これ歌うのも久し振りだな」

『結構キマツテたわよ、ミソラ』

「いい感じだったよ、ミソラ」

「／／あ、ありがとうスバル／／」

若干照れていた。

『しっかしアイツもよくまあそこまでやれるモンだぜ。何だか二人目のスバルがいるみたいですよ』  
とKYも程々にしろと言いたくなるような発言をしてしまったからさあ大変。

『ウォーロック！アンタはこっち来なさい！！』

『グエツ！ス、スバル！助けてくれ！！！！！！』

また何処かへさらわれていった。何時かウォーロックを虐めないでくれと話をしたスバルも今度ばかりはそう言う気になれなかった。

「はあゝ。ロックももう少し考えて発言して欲しいものだよね」

「ホントだよ！！せつかくイイ雰囲気だったのにさっきの一言でぶち壊しだよ。ね、スバル（怒）」

「そ、そうだね（いつもの委員長並に怖い・・・）」

さわらぬ神にたたり無し、である。

午後10時。

「あ、もうこんな時間だね。そろそろ寝よっか」

「そうだね」

二人はベッドに潜り込んだ。

「やっぱりスバルの隣はあったかいな」

「そ、そう？／＼／」

「うん じゃ、おやすみ。変なことしないでよ」

「し、しないよ。おやすみ」

(照れてるスバルってホント可愛いな。さあ、明日はデートだよ。思いつきり楽しんじゃうぞー!!！)

微妙な展開（後書き）

駄文です。すいません。

こんな文でも感想を送っていただければ幸いです。

ありきたりですいません。では。

## デート当日

今日は日曜日。本来なら学校が休みなので普段よりも寝ているスバルのだが、今日は彼女とのデート<sup>ミソラ</sup>の約束を意識してか、普段より早く起きた。現在6時35分。

『おう、スバル。早いじゃねえか』

「しっ、静かに。ミソラちゃんがまだ寝ているから」

ミソラは幸せそうに寝息を立てていた。

『スバル、昨日は悪かったな』

「えっ、何の事？」

『雰囲気を考えずにあんな事を言っちゃってますまねえ』

「ああ、その事ね。分かってくれればいいんだよ」

スバルが知る由もないだろう。ウォーロックがここまで素直に詫びている事の背後に、ハーブの重すぎる重圧がかかっていた事を。

「ん、スバルおはよう」

「おはようミソラ」

二人は起きた後、各々着替えた。二人とも今日の為に用意した服装だった。

1階、居間に行くと同親は既に起きていた。

「おっ、二人とも結構似合っているぞ」

「あら、ホントね。中々お似合いよ」

二人は照れていた。こういう所で言うのもアレだがリアルに新婚の様だった。

朝食を済まして外出の準備も整い、後はハヤトを待つだけになった。玄関を出るとハヤトは既に待っていたのだが……

その姿に3人（大吾も含んで）は驚いた。何とハヤトは着物姿だったのだ。決して高そうなものではなかったが髪と同じ青色がモチーフだった。

「ハヤトさん？どうしたんですかその格好？」

「ん、これかい？普段着だけど……それがどうかしたのかい？」

何故そんな事を平気で言えるのか分からなかったが、今スバルとミソラは少しでも時間が欲しかったので、気にしない事にした。

やがてウェーブライナーが到着し、4人は乗り込んだ。

スバルとミソラは二人で何か話しており、大吾はハヤトと話していた。

「……………」

「ところでハヤト君。失礼だが以前私にあった事はないだろうか？」

「いえ。ありませんけど」

「もしよろしければ、こつちに引越してきた訳を聞かせてくれな  
いだろうか」

「ええ。そう大した事ではないんですけどね。前にいた街がイヤに  
なつたんです」

「前にいた街？」

「ええ。そこはとても技術が発展していて豊かな街でした。と言っ  
ても豊かなのはモノだけ。緑が殆ど無かった。あの街に住んでいた  
間、僕は1度たりとも鳥の囀りを聞いた事がなかった。聞こえてい  
たのは車の音。見えていたのは慌ただしい人達の姿。皆、心にゆと  
りがなかった。僕は静かな所に行きたかった。そしてそんな場所を  
探しているうちにこのコダマタウンを見つけた訳です。この位でい  
いでしょうか？」

「ああ、すまなかつたな」

そうこうしている内にWAXAに着いた。

「へえ〜。ここがWAXAか。大きな建物だなあ」

入口には見慣れた男、暁シドウがいた。

「おつ、来たか」

「「暁さん!!!」」

スバルとミソラは駆け寄った。

「ホントに無事だったんですね。よかった」

「おいおい、俺があんな事であの程度の事でくたばってたまるかってんだよ」

『よくそんな事を平気で言えるものですね、シドウ』

シドウのハンターからアシッドがウィザード・オンした。

『やっぱりテメエもいやがったかアシッド！』

『久し振りですが相変わらずですねウォーロック』

『ヤッパリオメエのその性格気に入らねええええええ！勝負しろ！』

『生憎ですが今はそんな事をしている場合ではないのですよ』

『にやんだとくおうらあああああああああ！！！！！！！』

埒があかなそうだったのでスバルはウィザード・オフをした。

「すみません相変わらずで」

『気にしない事です、星河スバル』

「さくて……あ、連れて来てくれたか、彼を？」

「はい……って、ハヤトさん？」

ハヤトはというと、退屈そうに自分のビジライザーをかけて何やらブツブツ言っていた。

「一体どういう用件で呼び出したっつうんだよ、ったく」

『ブツブツ言っているのはホットケーキだけじゃなかったんですか』

「向こうから呼び出しておいてさっきからお喋りばかりじゃないか」

「ああ、悪い悪い。初めまして、暁シドウだ」

「……どうも、ハヤトです」

『初めまして、エレメントです』

「ま、こんな所で立ち話も何だろうし、とりあえず入ろうぜ」

『シドウ……』

「ん？……ああ、アレか。ハヤト、悪いけど指紋認証をお願いするよ」

「（初っ端から呼び出しかよ……）いいですけど」

ピーーーーーッ。

指紋認証が終了し、中に入った。

「じゃっ、サテラポリス支部へ行くか」

これにはハヤトが慌てた。

「おいおいスバル君。確か昨日はWAXAに来て欲しいって言ってなかったかい？」

「僕だってそう聞いていましたよ」

「ああ、急遽場所を変えたんだ」

「どうしてそんな事を？」

シドウはすました顔で言った。

「いやあ、そっちの方が面白そうだろうっ」

（（やっぱり暁さんは暁さんだ……））

スバルとミソラは同じ事を考えていた。

到着すると既に長官とヨイリー博士と天地が待機していた。

「ゴメンネ、スバルちゃんにミソラちゃん。学校がお休みなのに呼び出しちゃって」

「いえ、大丈夫です」

「それより話って何ですか？」

「1つはスバルちゃんが天地ちゃんに預けたカードの事について。もう1つは……ハヤトちゃんだったかしら、貴方に用があるの」

「（呼び捨ての次はちゃん付けかよ。相変わらずだな……まあ仕方ない）僕にですか」

「そうよ。じゃあ1つ目の話ね」

## 予想される次の危機

「スバルちゃんが天地ちゃんに調べて欲しいと言って渡したこのカード。その後私の元に連絡が入って私も調べてみたの」

「それで何か分かったんですか？」

「少しだけ分かった事があるわ。このカードには使った人やウィザードの負の感情に反応するらしいわ」

「負の感情？」

「ええ。怒り、憎しみ、悲しみ、嫉妬という感じかしらね」

「ん？このカードは何処かで・・・」

と、ハヤトが首を突っ込んできた。

「ああ！コイツは・・・」

「どうしたのかね？これに見覚えがある？」

「ああ。僕が引越してくる前に何度か見た事がある。スバル君、これは一体誰が？」

「委員長でしたけど・・・」

「やっぱりそうか・・・」

「何か心当たりでもあるのかい？」

ハヤトはうスバルとミソラの関係にルナが嫉妬してこのカードを使ったという自分の推測を話した。

「しかし、彼女がどうやってコレを手に入れたというのだ」

「それはまだ分かりませんが、現にこのカードが存在する以上、これが次の脅威になる可能性がかなり高くなることは否定できないでしょう」

「確かにその通りね天地ちゃん。でもそれ以上の事はまだ調査が始

まったばかりだからどうしようもないわ

「今後も調査を続けましょう」

「ええ、そうね」

「じゃあもう一つの話。この為にハヤトちゃんに来てもらったの」

「正直どういう用件で呼ばれたのか今でも分からないんですけどね」

「あなたのウィザードについて少し調べたい事があるの」

「エレメントを？」

「ええ」

「……まあ、いいですけど」

「じゃあWAXA本部に行こうぜ」

スバル、ミソラ、ハヤト、大吾、ヨイリー、シドウ、天地、長官5  
7Fへ向かった。エスカレーターで到着するとジャックとクインテ  
イアが待っていた。

「よお、スバル」

「ジャック」

和気藹藹していた。

「おいおいジャックくん。なんでエレメントの事話しちゃったんだよ」

「あん時はマジで驚いたからな。ゴン太がウィザードに負けちまったんだからよ」

「私も最初は信じられなかったわ」

「あの、貴方は？」

「初めまして、クインティアです。ジャックの姉です」

「ん〜で、俺の……」

ゴチンー！！

シドウがクインティアの拳骨により沈んだ。

一通り挨拶を終えた後、ハヤトは周りを見回した。

「へえ〜。ここが指令室。凄そうな機械が沢山あるな〜」

ひとりでに機械の観察を始めた。流石にメインコンピューターは弄くられると困るので隊員が阻止した。ハヤトも仕方なく諦めた。スバル達から見れば只の変わった人にしか見えなかった。

「そろそろいいかしら」

「・・・はいはい、どうぞ」

普段のヨイリーが逆の立場にいるので何ともシュールな光景だ。

ハヤトがエレメントを差し出す。

メインコンピューターにデータを転送し、ヨイリー博士がパネルを操作し始めた。

・・・約10分後、やや納得しない顔で振り向いた。

「終わったわ」

「何か異常でも見受けられましたか？」

「いいえ。でも何か釈然としない事があるわ。ハヤトちゃん、もし

よければエレメントちゃんを少し預かってもいいかしら？」  
「・・・少しなら」

「早ければ今日中には返してあげるわ」

「・・・分かりました」

『ハヤト・・・』

「心配要らないぞ、エレメント」

『いや、そうじゃなくて・・・いいんですか？』

「ん〜・・・あ〜、そうか・・・」

現在時刻は12半過ぎ。ハヤトのバイト先はウェーブライナーで行つても少し時間がかかる。始まる時間は午後3時。が、まだ店の同僚を知らないので挨拶だけはしておきたかった。

171

「そのほかに用件は？もしなければ僕バイトがあるのでそろそろ失礼したいんですけど」

「ええ、分かったわ。もういいわよ」

「それでは・・・」

背を向けてその場から去るつとすると、

「待って！」

呼び止めたのはなんとミソラだった。

「どっしたの？」

次に言うべき事は分かっている筈なのに何故か言えなかった。

「（絶対彼はHAYATOのハズ。ただそれを確かめただけなのに、どうして聞けないの？）・・・いえ、やっぱりいいです」

「そう・・・」

素っ気なく答えるとその場を立ち去った。

「どうかしたのミソラ？」

ミソラは何かにつっ掛かっていそうな顔で答えた。

「ハヤトさん、私が一回歌手を引退する前にいたメンバーの一人にソックリなの。でも彼はその前に私に黙って何処かへ行っちゃったの・・・」

目には涙が溜まっていた。

「もしかしてハヤトさんがそのメンバーだったっていつの？」

「確証はないけど間違いないと思う。あの時の彼の演奏にも、その癖が感じられたから」

もしミソラの言う事が正しければ、ハヤトは再びミソラと会ったあ  
の時、どんな心境でいたのだろうか。状況が良く分かっていない為  
スバルには慰める事しか出来ない。

「ハヤトさんを信じてあげようよ。きつといつか訳を話してくれるよ」

「スバル・・・うん、そうだよ。きつといつかちゃんと理由を話してくれるよね」

また笑顔に戻った。

「じゃあスバル。デートに行こっ」

「ノノノ、うんノノノ」

「ほお、二人はもうそこまでの関係になったのか」

と、首を突っ込んできた暁。

「いいよなあ。俺もクインティアと何処かに行きたいけれど仕事が先とか言っただけ承知しないんだよね」

そこにクインティアの右ストレートがシドウの腹にクリーンヒットした。

「当たり前でしょう、まったく。シドウが仕事をサボるから、その分まで私達がやらなくちゃいけないんだから」

二人は苦笑するしかなかった。

「まっ、今日はこれで終わりだ。楽しんでこいよ二人とも」

「はー…」

そしてWAXAをあとにした。

## デート

スバルとミソラは最近オープンしたばかりの遊園地に到着した。

「流石にオープンしたばかりだから人が多いね」

「そうだね。何処に行こうか？」

二人で手を繋いで広い場所を歩くのはこれが初めてだろう。

「何処から行こうか？」

「うーん・・・じゃあアレ乗ろうよ」

と、ミソラが指さしたのはジェットコースターだった。

「いいね。行こう」

チケットを買って待つこと約十分。漸く自分達の番が来た。余談だが二人が並んでいる間に後ろには長蛇の列が出来ていた。

「早目に来るとして正解だったね」

「そうだね。それにいつもの服装だったら、あっという間にミソラはファンにバレちゃうよね」

「そんな事言ったらスバルはロックマンなんだし、それこそ大変な事になるんじゃないのかな？」

「それもそうだね」

そんな話をしながら一番前の席に乗り込んだ。

「間もなく出発いたします。ハンドルにしっかりとおつかまり下さい」とアナウンスが流れた。

ジェットコースターが動き始めた。そして嵐の前の静けさ……つかの間の沈黙が流れたと思いきや、一気に急降下した。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！……！！！」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！……！！！」

一方は楽しんでいる悲鳴、もう一方は恐怖している悲鳴である。

「あゝ楽しかった」

晴々とした感じのミソラとは逆にスバルは少し顔が青ざめていた。

「ス、スバル！？大丈夫？」

「うう、まさかあんなに高い所まで上がってあんなに速いだなんて

思っていなかったからチヨット気持ち悪くなっちゃった」

「じゃあちよっと休もうか」

「うん」

二人はベンチに座った。

「今日はいい天気だね」

「そうだね。空が青くて清々しいよ」

すると、

グゥ、とスバルの腹がなった。

「何か食べようか」

「うん。じゃあ・・・あ、あそこ行こ」

ミソラが指さしたのは中華店だった。

二人が中に入ると本格的なものが多いこと。店員は全員チヨイナの民族衣装の恰好をしているし、棚には色々な動物の置物などがあった。

「ご注文は・・・」

お昼だから沢山食べる必要はないだろうと考えていたスバルは

「僕はチャーハンで」と普通盛を注文した。一方のミソラはというと・・・

「私は味噌ラーメンにギョーザーに春巻きに海老チリに・・・」

と大量に注文していた為、スバルは飲んでいた水を噴き出し、店員も目を丸くして驚いていた。

「ミ、ミソラ！？そんなに食べて大丈夫なの？」

「全っ然平気だよ」

と笑顔で答えるミソラ。その笑顔を不覚にも可愛いと思うと同時に（ミソラちゃんの胃袋って本当にブラックホールなんじゃないかな？）と考えるスバルであった。

スバルは一品しか頼んでいないため、テーブルに並んでいる料理の九割以上はミソラのオーダーである。それらを美味しそうに、且つかなりの速さで食べて行くのだから微笑ましくも前述の様な心境になる訳である。スバルがチャーハンを食べ終えた頃、待っていた様にミソラが春巻きを箸で挟んで、

「はい、あ〜ん」とこちらによせてきた。

「い、いいよ」と拒否するもどんどん近付けてくるミソラ。とうとう観念して春巻きを口に入れた。サクサクとして中のとろみが美味しい・・・と思ったら食べ終わる直前に異様な味覚がした。そして辛味の間が口の中全体を覆った。ミソラはその光景を見て笑いを必死に堪えていた。裏側に辛子を付けていたのである。当然スバル

の手は反射的にコップへと向かう。水を一気に飲み干した。

「ミソラ、何でこんな事したの？」

「何とな〜く。面白そうだったから」

その笑顔故なのか怒る気にはならなかった。

会計を済まして外に出ると、ミソラは相変わらずはしゃいでいた。

「ねえ、次は何処へ行こうか」

「ミソラが決めていいよ」

スバルはこの後後悔する事になる。こんな事言つべきではなかったと。

ミソラは入り口で貰ったパンフレットを開いた。そして明らかに何か企んでいる顔をしながら・・・

「じゃあここにしようっと」

スバルと手を繋ぐとステップを踏みながら目的の場所へ向かった。

その場所に到着した途端、スバルは青ざめた。その場所とは・・・お化け屋敷であったのだ。

「ミソラちゃん。ここはやめておかない？」

「スバルが私の好きな所にしていいって言ったんだよ」

まさに後悔先に立たずである。

「もしかしてスバルってお化け苦手？」

「そ・・・そ・・・そんな事ないよ。大体お・・・お化けなんてそんな非科学的なものあるわけな・・・ないじゃないか・・・」

「じゃあ大丈夫だね」

再び手を繋いで中へ入っていった。

中は真つ暗。スバルが震えているのでその振動が手を介して伝わってくる。

(やっぱり怖いんだ)とは思いつつも一歩下がってスバルが進むのを待っていた。

「?ミソラちゃん。なんで進まないの？」

「スバル・・・先に行つて」と怖がっているフリをした(無論多少は怖いのだが)。相変わらず手は握ったままだ。

(ここは僕がしっかりしなきゃダメだよ)震えつつも前へと進んだ。

が、やはり怖いものは怖いものだ。BGMの異様な音や声がすれば一々体が反応してビクつく。でも男は度胸。それだけがスバルを動かしていた。そこへのっぺらと提灯のお化け（名前を知らない）が目の前に現れ、同時に女のすすり泣きの様な音が聞こえた。その音に耐えきれなくなったスバルは手を強く握りしめ、出口に向かって走った。

「あ、ちよつとスバル／＼／＼」照れつつもちよつと嬉しかったミソラだった。

やっと外に出た時スバルは既に息切れ。ミソラも少々疲れていた。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

時刻は午後三時頃。関係はないがハヤトがバイトを始めている頃だろつ。

先程とは違う場所のベンチに座る二人。

「ミソラ大丈夫？腕痛くない？」

「大丈夫だよ。それより私は嬉しかったなあ」

「何が？」

「スバルが自分から手を繋いできてくれて／＼／＼」

ミソラの手にはまだスバルの温もりが残っていた。

辺りを見回すと売店があり、アイスクリームを売っていた。

「スバル、アイス買ってきて」

「え、何で？」

「こつこつ時はアイスって決まっているんだよ」

「そつこつものなの？」

「そつこつものだよ」

まあ折角のデートだからミソラのささやかなお願いくらい聞いて御機嫌を取ろうと思ったスバルは売店へと向かった。

アイスは三種類。バニラとチョコレートとミックスがあった。

「バニラを二つ、コーンで」

「ありがとうございます。240円です」

そのアイスのサイズはスバルから言えば少々大きめで、ミソラが喜びそうな大きさだった。

「はい、買ってきたよ」

「わぁ、ありがとう」

ベンチで座って舐めているとミソラがこっちを向いていた。

「ミ、ミソラ？どうかしたの？」

「……………」

すると突然ミソラはスバルのアイスに喰いついた。

「／／／ミソラちゃん！？い、今のって／／／」

「うん 私とスバルの間接キスだよ」

「ちょっとソレは止めてほしいなあ／／／」

「どうして？私達もうキスしたでしょ」

そう言われると何も言えなくなってしまったスバルであった。

その後も色々回って初めてにしてはまあまあ楽しめた。

時刻が午後4時を回った頃・・・

「今日は楽しかったね」

「うん スバルとデートできてホントに楽しかったし嬉しかった」

ミソラが満足そうな顔をして言った。

「そつだ。ね、スバル。最後に観覧車に乗ろうよ」

「うん、いいよ」

観覧車の方はジェットコースターとは違って思いの外すいていた。

ゆっくりと一周するこの時間。愛しの人と二人きりになるにはある意味もってこいの場所だ。時刻が時刻だけあって夕日が綺麗だった。

「スバル。今日はアリガト」

「お礼なんていいよ。約束していた事だし」

ミソラは首を振って言った。

「そうじゃなくて私の傍にずっといてくれてっ事。何だか一方的に振り回しちゃったような気がして」

「そんな事ないよ。ミソラちゃんとデートできて僕も楽しかったよ／＼／」

「ホントに？」

「うん」

「も〜スバルったら／＼大好き」

と席を移動してこっちに来てスバルに寄り添った。

「暫くこのままでもいいよね」

「う、うん。いいよ／＼／＼／＼／」

その状態が一周し終わるまで続いた。

「さて、そろそろ帰ろっか」

「うん」

その時、風が吹いてミソラの帽子が飛ばされてしまった。

「あつ、私の帽子・・・」

スバルが走って拾いに行った為遠くに飛ぶ事はなかった。が、

「おい、あれってミソラちゃんじゃないか!？」

「ミソラちゃんだって!？」

とファンの人々が集まってしまった。まあ特徴の一つでもある赤紫色の髪を見られてしまったらばれてしまうのも仕方ない事だった。

「どうしようハーブ、っていない!？」

まあその筈。ハーブはミソラを二人つきりにする為にウオーロックを何処かへ拉致していたのだから。

そこへスバルが戻ってきた。

「スバル〜どうしよう?..」

「こうなったら・・・」

スバルはウオーロックをウイザード・オフした。そして、

「トランスコード・シューティングスターロックマン!..」

と叫び、ミソラを抱えて飛んで行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3091/>

---

流星のロックマン 試される絆

2011年8月11日07時37分発行